
THE TEAM! (2)

緒例

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TEAM！（2）

【Nコード】

N0939E

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

掃除屋「TEAM」を営む篠原快の家に、長期任務に出ていた面々が戻って来た。しかし、何やらまた大きな任務が快達バスターに襲い掛かるうとしていて……

プロローグ1

箒星学院の近くにある九条高校。

高い進学率を誇るその高校に、

一つの事件が起ころうとしていた。

どこからどう見ても繊細という美少女が、
放課後の科学室に呼び出されていた。

「待たせたね」

「沢崎先生……」

可憐な美少女は声のした方を向く。

彼女を呼び出したのはまだ三十半ばの科学の教師だ。

生徒の人気も高く、女生徒からの告白も絶えない。

そんな教師が、今日はいつもと違った。

「さて、今日君を呼び出したのは他でもない。

僕の愛を受け取ってもらうためだ」

いきなりの発言に美少女は戸惑う。

その現れかのように、

グレーのセーラー服が僅かに揺れた。

「さすがに驚いているね。

だけど大丈夫だ。

怖いことは何もないから」

「いやっ！」

少女は声を発したが、

いきなりそれすらも不可能になった。

「無駄な抵抗は止したほうがいいよ。
僕はかつてバスターをしていてね。
それも

「時空タイプ」と言って時間を操る能力者なんだよ。
だから君は逃げられないんだ」

美少女は必死に抵抗する。

しかしそれにも構わず、沢崎は近寄ってきた。

「どうしてもというなら記憶を消してあげよう。
まあ、いままで残してほしいと言った生徒はいないけどね」
「当たり前です。」

だから私たちは苦勞させられたのですから」

いきなり少女が声を発した。

それに沢崎は驚く！

「私達が今回与えられた任務は、
時空タイプのバスターの捕獲です。
覚悟してください」

しかし、そこで諦める男でもなかった。

「フツ、君が例えバスターでも、
一般のバスターでは私は倒せない」

しかし、その言葉はすぐに掻き消された。
沢崎は自分の体の感覚を失ったのだ。

立ち上がる力が消されて地面に倒れる。
そして少女がとどめの言葉を刺す！

「御存じじゃないんですか？
私たちは影です」

少女がそう呟いた。
それを聞いて男の顔は青ざめる。

「影だと・・・！
まさかあの

「TEAM」の特殊部隊か！」

それが事実だった・・・

ブローグ1（後書き）

第二弾がやって参りました！今後ともよろしくお願いします

プロローグ2

TEAM特殊部隊

「影」。

掃除屋の中でも特に秀でているものが属するエリート部隊。目の前にいる少女はその名を発した。

「時空タイプの捜査は私の専門でしたが、

まさかこの高校に三人もバスターがいるとも思わなかったので、一人ずつの捜査に一ヶ月費やしてしまいました。

だけど、ようやく尻尾を出してくださったことに感謝します」

しかし、沢崎は力を再び増幅させ始めた。

「ふざけるな！ たかが十六の小娘に捕まるか！」

「捕まりますよ。」

実力の差は時空タイプならとくにわかってるはずですよ」

「認めん！ 貴様の時間を操作する！」

タイムドール！」

沢崎は少女の時間を操作しようと術を放つ！

しかし、少女は冷静だった。

そして一言で片付ける！

「リバーズ！」

「ぐっ！！」

術は簡単に返された。

時空魔法の勝負は実に簡単。

いかに時間を支配できるかだ。

「勝負ありです。」

倒れてください、沢崎先生」

強い衝撃波が腹部に叩き込まれ、

沢崎は意識を失った。

そして少女は呼ばれた。

「終わったか、咲」

「龍二さん」

後ろを振り返ると、

彼女と同じ高校一年生の少年が立っていた。

どこからどう見ても、

わんぱく少年にしか見えない。

「これで任務も終わりました。」

みなさんと合流できますね」

咲はニツコリ笑うと、

白い歯を見せて龍二も笑った。

「ああ。帰れるんだな、箒星学院に！」

二人のバスターは合流することになる。

世間を騒がすバスター、

「篠原快」と……

プロローグ2（後書き）

いよいよ次回は本編です お楽しみに！

第一話：事件発生

名門・箒星学院。

今日も朝から生徒たちが朝練に明け暮れる中、

高一のバスタークラスでは、

一つの速報が飛び込んで来た！

「大変よ！ 快君が知らない女の子と歩いていた！」
「なっ……！！！」

カレカノ同盟全員が言葉を失った。
今や世間で

「篠原快」の名前を知らぬものはいない。

「掃除屋・TEAM」の天才高校生バスターだ。

しかし、箒星学院では、

彼の容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群が人気の理由だが……

「ちょっと翡翠！ あんた快から何も聞いてないの！」

同じTEAMのバスターである山岡優奈は、

快の思い人であるはずの風野翡翠に尋ねたが、

「特に何も言ってなかったよ？」

さらさらのボブカットがわずかに揺れた。

特に気にしないのも長年の付き合いだからこそ。

何かあれば快が言ってくれると信じているからこそ、

翡翠は特に嫉妬しない。

自分の彼氏でもないのだから……

そしてすぐに噂の主は、いつも通り教室に入ってきて来るのだ。

「ちょっと快君！ 昨日一緒に歩いてた女の子誰！」

「篠原！ お前翡翠がいながら何を考えてるんだ！」

「そうよ！ 見損なつたわ！」

次々と浴びせられる批難。

そして反論させてくれないのもこのメンツならではの。

しかしそれを打ち破ったのは、

意外な人物であった。

「おい、お前説明してなかったのか？」

剣道部の朝練から教室にやって来たのは時枝修だ。

それに快も相槌を打つ。

「ああ、こいつらすぐに突っ掛かってきてよ。

箒星小の奴らなら絶対知ってるのによ」

それを聞いた幼なじみ達は驚く！

「おい、まさか陽子が戻って来たのか！」

「ああ。それにするさいのもな・・・」

快は心の底から溜息をついた。

そして予鈴が鳴るのだった・・・

第一話：事件発生（後書き）

ようやく本編です。お楽しみください

第二話：転校生

予鈴から一分後、色鳥白真は猛ダツシュで教室に飛び込んで来た！

「快ちゃん！ あいつが帰ってくる！」

白真は嬉しさ全開だ。

しかし、それとは対称的な態度を快はとる。

「あいつ？ あいつじゃ分かん。」

一体誰のことを指してるんだ？」

まるで答えたくもなさそうな表情をして、
快は深い溜息をついた。

「龍二だよ！ 瀬野龍二！」

それに咲もうちのクラスに入るって！」

「咲ちゃんが戻ってくるの！」

翡翠は歓喜の声をあげた。

九条高校は寮制のため、

しばらく篠原邸に戻ってこなかったのである。

そんな彼女が帰ってくるというのだ。

「賑やかになりそうだな」

「全くだ……」

修の言葉に快はこれまで以上の溜息をついた。

「お前達！ さつさと席につけ！」

担任の大原がチャイムより早い

「声着」を出す。

これで座らないものがないだけ、
このクラスは平和である。

「今日は転校生を紹介する。

知っているものも多いと思うが、

瀬野、和泉、相川入れ」

そして三人の生徒が教室に入ると大歓声が上がった！

「うわあ！ 可愛い！！」

「美人！ 彼氏持ちか！？」

「TEAMのとこばかりずるいぞ！」

「一人ぐらいうちに寄越せ！」

瀬野龍二以外を除いて、

二人の美少女に注目は注がれる。

「黙れ！ 咲は俺の婚約者だ！

近寄るんじゃないねえ！」

元気少年瀬野龍二からの爆弾発言。

少し頬を紅く染めた和泉咲を見て、
クラス中が絶叫した！

「ええ~~~~！！！」

しかし、それを笑みを浮かべて相川陽子は聞いているのだった。

第三話：ホームルーム

龍二の爆弾発言により、
バスタークラスの反応は様々だったが、
そこを締め直すのが担任の大原である。

「瀬野、お前から自己紹介しろ」

「うっす。瀬野龍二だ。」

TEAMでお世話になっている。

特技は剣道。当然、打倒・色鳥白真！

そして、咲とは親同士が決めた許婚だ。

何があっても手を出すな」

もはや白真以上の独占欲の塊だと認識された。

しかし、TEAMの面々は、

龍二の方が独占欲を押さえてると思っではいるわけだが……

「次、和泉」

「はい。和泉咲です。」

私もTEAMでお世話になっております。

部活は弓道部に所属しようと考えております。

よろしく願います」

ようやくまともな空気になってきた。

拍手が起こったのも、

このクラスの自己紹介では珍しいことだ。

「よし、それじゃあ相川」

「はい。相川陽子です。」

私は中学三年間、アメリカに留学していました。
なので日本語の文法がおかしくなっていたらごめんなさい」

そして陽子が礼をすると、
また質問が飛び交う。

「陽子ちゃんって彼氏持ち？」

「どんな子がタイプ？」

「やっぱり快君が好きなの？」

「それよりどうして昨日快君と歩いてたの？」

それは誰もが思っていたこと。
そして視線は快に注がれる。

「今日から家に下宿するから、
その買い出しに付き合わされてたんだよ」
「なる」

担任の大原までが頷く。
説明さえ出来ればこのクラスは落ち着くのだ。

「とりあえず三人とも空いてる席につけ。
それと期末まであと二週間だ。
全員赤点にならないように！」

そしてホームルームは終わったのである。

第四話：授業

一時間目に陽子の流暢な英語を聞き、
二時間目に咲の夢心地な古文を聞き、
そして三時間目は・・・

「瀬野龍二！ お前は転校初日から居眠りか！」

担任の大原が怒鳴り声をあげる数学になる。

「だってよー大原ちゃん。

俺は昨日徹夜の任務でさ」

「バカモン！

バスターなら一日ぐらい徹夜できる体質だろう！

言い訳になるか！」

周りのメンバーは頷く。

体力自体が異常なことなど、

長年バスタークラスの担任をやっているれば、

嫌でも分かるのである。

「ちえっ！ 翔と大地がこういう日に任務とは……………」

赤点仲間の二人の名前を出す、

「翔は数学だけ得意だぞ」

「だよな。意外だが」

これまたクラスの面々は頷く。

「静かに！とにかくここは期末範囲だ。

TEAMには篠原も時枝もいる。

早目に今まで学習した内容を聞いておけよ。

では次の問題を山岡」

「はい」

優奈は前に出て問題を解き始める。

そうこうしているうちに、

あっという間に数学の授業は終わるのだった。

そして昼休憩・・・

「全くお前は！

中学のときから何も変わってねえな」

弁当にありつきながら、

快は龍二に文句をたれるが、

「そう怒るな。お前とは頭の出来もちがうしな」

龍二はカラカラ笑う。

「・・・お前が

「影」によく配属されたと思うよ。

うちのエリート部隊だってのに」

快は少し声を落としていった。

「影」はその名のとおりの部隊なのだから・・・

「まっ、実力実力！
それより修は一緒に飯喰わねえのか？」

今ここにいるのは快、白真、龍二だ。
修はいなかった。

「修ちゃんは陽子と飯食ってるんじゃない？」

白真の答えにクラス中が三人の方を向いた。

第五話：修と陽子

「陽子ちゃんと修君は付き合ってたの！」

バスタークラスはまたまた騒ぎ始めた。
しかし、相変わらず快は冷静である。

「まあな。とはいっても、
三年間音信不通だったから、
今の状態がどうかは知らんが」

弁当箱を包みながら快は答えた。
ただこの三年間、

修は彼女を作らなかったことだけが事実である。

「だけど、陽子はどうなんだろうな。
あの器量で男が言い寄ってこないことはないだろうし」

龍二も人の倍の昼食を完食して話に加わる。
そして翡翠に視線が注がれる。

「大丈夫！ 陽子ちゃんは修ちゃんのが好きだよ！
だって三年前より美人になったんだもん！」

翡翠がそう言えばそうだと思う。
二人が三年前のままであってほしいと願うのだった。

そして噂の二人は……

「この三年間、どうだった？」

「別に何も変わってないな。」

快の家で居候になったこと以外」

弁当箱の中身はなかなか減らない。

特にしゃべってるわけでもないが、

二人とも背中合わせで昼食をとっていた。

「あら、聞いた話では修のファンクラブの会員数が増えたみたいだけど」

「興味ないな」

あっさりと修は返した。

自分のことより、陽子の話の方が気になっていた。

「相変わらずね。」

その分だと彼女がいなくて話も本当みたいね」

「お前が彼女だろ。」

それともこの三年間で俺は消えたのか？」

少しだけ修は苛立っている。

それが空気で伝わって来た。

「まさか。私はずっと修が好きだったもの」

陽子は少し悲しそうに笑った。

「だったらどうして手紙も寄越さなかった？」

「それは……」

それ以上、陽子は何も言わなかった。

第六話：威圧

TEAM本社。

この日学校を休んで任務に出ていたのは、橘大地、片岡翔、美原紫織の三人である。この三人に与えられていた任務は、いつもの任務より少し重大なものだった。

「社長、私たちが盗んで来た細胞のサンプル、一体何に使用するつもりですか？」

紫織が尋ねる。

彼女達の今回の任務は

「盗み」。

普通なら犯罪だが、

掃除屋の世界では正当化される。

もちろん、場合によっては裁かれるが……

「こいつ？ 俺もよく分からないな。

化学はかじってる程度だし」

顔はかなりのイケメンなのに、

今日は股引きに腹巻姿の社長、

篠原義臣は相変わらず抜けた答えを返す。

しかし、この男が掃除屋界最強と謳われるバスターだからこそ、このTEAMには優秀な人材が集まってくるわけだが……

「ふざけないで下さい。

勝手にデータを見させてもらいましたが、

なぜか快の名前が出てきました。
それに社長の細胞まで」

そこまで言うと、紫織は立っていられなくなった。
威圧されたのだ、義臣に！

「社長！」

翔と大地も食いかかるが、
すぐにそれも掻き消される！

「悪いな。お前達には話せない事情もあるからな。
これ以上深入りすることは禁ずる。
だが心配するな。」

俺はお前達の保護者でもある。
だから裏切ったりはしないよ」

そして義臣はいつもの笑顔を向ける。
そんなことは分かっているのだが、
この時ばかりは、不安に駆り立てられるのだった……

それから三人が退出後、
妻の夢乃が部屋に入ってきた。
しかし、今日はいつもと少しだけ違った。

「あの子達を威圧するなんて、
随分ひどい社長ですね」

「理由は聞いてくれるんだろう？」

そう言って義臣は夢乃に書類を手渡した。

第七話：事件の幕開け

「あれ？ 大地ちゃんなんか元気なさそうだね。何かあったの？」

不思議な顔をして翡翠は尋ねる。

TEAMの食堂でコック見習いの少年は、いつもは元気に鍋をふるっているが、今日はどこか変だ。

「ほっときなさい。」

また料理長に大目玉くらったんでしょ」

大地の彼女である優奈はワカメスープを口に運んだ。とはいっても、少しばかりは心配しているが……

「ああ、そんなところだな。紫織は大丈夫なのか？」

自分達以上にショックを受けた紫織は、食堂にも顔を出さなかった。

「紫織は寝てるよ。やっぱり疲れてたのかな、連日の任務だったんでしょ」

違うと思ったのは大地と翔だけ。しかし、義臣が威圧したとは口が裂けても言えなかった。

「そうか。白が帰って来たら食事を紫織の部屋に運ばせる。
だが、快の奴はどうしたんだ？
寝てるわけもないだろう？」

最もな問いに食堂にいた面々は首を傾げた。

快が所属するサッカー部の練習は休み。

剣道部と弓道部が遅くなると聞いているぐらいだ。

「次の任務の打ち合わせかしら？

ブラッド崩壊以来、

大きな任務が来てないのでしょ？」

「そうだね。だけど、やな予感がする……」

翡翠はブラッドと戦った時と同じ、

不安が胸を埋め尽くしていた。

そしてその当人は……

「俺は飯が食いたいんだがな、社長」

夕食前に呼び出され、

快はご機嫌ななめなのだが、

義臣はあっけらかんとして答えた。

「そう怒るなって！

お前に面白い任務を流してやるからさ」

義臣は書類を快に投げ渡した。

それが今回の事件の幕開けだった。

第八話：影の情報

「細胞バンク……これって

「影」の管轄だろ。

それを俺達にやれって言いたいのか」

一通りのデータを見終わった快は義臣に意見する。
自分はいいとしても、

チームメイトにこの任務は危険過ぎる。

「ああ、そうだと思うがな。

翔達に細胞の盗みの任務やらせちゃったし」

そこまで言うと、

義臣の前髪がパラリときられた。

「ふざけてんのかクソオヤジ！」

青い闘気が快の手を覆っている。

それが義臣の前髪を切り落としていた。

「いやいや、ふざけてはないよ。

それにあの三人にやらせた理由も後から分かるから。

それより、今回のチーム編成なんだけど、

龍二と咲、それに陽子を付けようと思うんだが」

「それはかまわねえよ。

龍二はともかく、咲と陽子はかなりの手練だしな」

龍二がいれば間違いなく飛び蹴りの一発は入る返答をする。

「それだけだな、陽子には気をつけておいてくれ。
アメリカの影達からの連絡でな、
陽子は細胞バンクの奴らと関わりを持ったらしい。
その実態を明らかにするためにも、
今回はお前と組ませる。
もちろん、援護は安心しろ」

僅かばかり、義臣は陽子を疑っていた。
本来なら疑いたくないのだろうが、
TEAM全ての命を守るためには、
厳しだけは捨てるわけにはいかないのだ。
それがたとえ自分の息子でもだ。

「分かった。
こつちも期末前で忙しいからな、
出来るだけ早く下調べしてくれよ」

ケチだけ付けて、快は社長室から消えた。

「いいのですか、社長。
快さんにこちらの任務を手伝っていただいても」
「気配の消し方、さらにうまくなったな、咲」

天井に潜んでいたのは咲だった。
快に気配を悟られないものなど、
早々いるものではない。

「とりあえず大丈夫だ。
あいつはもともと影に入った方がいいぐらいだしな」

「いいえ、そちらの方ではありません」

咲が心配する意味はこのあと語られる。
消して日の当たることを望まない、
影の情報として・・・

第九話：剣道部

「白と時枝とやりあえる奴がいたとは……」

「ああ、今年の全国は団体戦で優勝できるかもな」

龍二は転校初日にして、

ちよつとした注目を浴びることになった。

それは咲との婚約宣言の性ではない。

咲との婚約宣言は、

あまりにも恥ずかしがった咲が、

時空魔法の一つ、

「記憶操作」で消し去ったのである。

注目を浴びてる理由は、

龍二の剣道の腕だ。

「なんだ。全く錆び付いてないのか」

「お前、相変わらずの余裕だな」

打ち合っているのは修と龍二だ。

中学三年間、全国準優勝を飾る修は、

箒星学院のエースになっていた。

もちろん白真もだ。

「錆び付いてないって、

瀬野は前の高校で剣道部に入ってなかったのか？」

「そうっすよ。」

短期の潜伏任務だと目立つわけにはいかないし」

白真はさらっと答える。

バスターだからこそ、通じる理由である。

龍二は九条高校で剣道部に所属しなかった。
したとしても、どのみち記憶は消されるからだ。
潜伏した痕跡は残さない。
それが影の絶対的条件である。

「ふーん。まっ、うちとしては強いやつは歓迎するがな」

余計な詮索をしないのも、
箒星学院ならでは。

したとしても、その記憶すら消されるのだが……

「だけど先輩、あいつは頭悪いから試合に出られるか分かりません
よ？」

「なんだと白！」

試合をそっちのけで龍二は白真に食ってかかるが、

「わりい、聞こえた？」

相変わらず無邪気な返答を白真はよこす。

本当にこの少年が全国三連覇をやったのけたのか、
疑わしくなるときも多々ある。

「決まってるだろう！」

龍二は白真に竹刀を振り下ろすが、

「面！ 俺の一本勝ち」

修は龍二の背後から容赦なく面を喰らわせる。
それを笑う者多数……

「修……デメエ……！！！」

怒り狂った龍二を相手にするのは面倒ではあるが、
この時ばかりはさすがに修も楽しかったのである。

「修ちゃんが笑うなんて珍しい」

白真の呟きでこの日の練習は終わった。

第十話：ごまかし無用

「よお、ようやく帰って来たか」

広い玄関の前でばったりと剣道部三人組と快は出くわした。

「ただいま快ちゃん！」

白真は快に抱きつこうとしたが、快はひらりと避ける。

「たつたとシャワー浴びてこい。」

そのまま食堂にいくなよ」

「学校で浴びて来たよ！」

剣道部に対する偏見反対！」

夏場の剣道部は確かに汗まみれになるが、一日中あの異臭を放っているわけでもない。

「偏見じゃないさ。」

ただいつもにまして温度が高く感じたただけだ」

「快、それは間違いないな」

修は同意する。

そして視線は龍二へと向くのだ。

「おい、お前らなんか俺に怨みでもあるのか……」

今日の部活といい快の態度といい、

やけに二人は龍二に突っ掛かっていた。

「確かにそうだね。

快ちゃんも龍二のことを翡翠が話しているのが気に入らないだけでしょ」

「お前らまだくつついてねえの!？」

快のげんこつが龍二に直撃する。

「だけど、修ちゃんは陽子絡みのことを龍二が隠してるのが気に入らないんですよ」

核心に迫る発言が龍二を逃さない。

しかし、やはり

「影」は飾りじゃない。

「隠すも何も、快の方が詳しいんじゃないの?」

今日にでも義臣の命令が下ることを、
龍二は知っていたのである。

「どうなのかな、快ちゃん」

快はため息をついた。

どっちに転んでも、白真の思う壺にはなるわけだ。

「下ってるよ。」

細胞バンクの調査依頼、または交戦の可能性ありのな。
近いうちにお前らにも援護要請が来るさ。
ただ、

「影」の任務だ。

俺と龍二でも教えられてないことはある」

陽子のことはうまくかわした。

大きな任務だと言えは、

少しは聞くことを躊躇わせることが出来るからだ。

「そうか。だが、快。

後からもう少し詳しく教えるよ」

修にごまかしが効くはずがなかった・・・

第十話：ごまかし無用（後書き）

久しぶりの更新です またよろしく願いします

第十一話：宣戦布告

快の部屋は比較的にもものがない。

あるのは机にベットに木製のテーブル。

そして滅多につけないテレビだ。

服はすべてクローゼットの中である。

そんな部屋に今、

親友の修はサラサラとペンを動かしながら、

この部屋の主に尋問しているのである。

「で、社長は陽子の動向を探れと言ってるわけだ」

「ああ、そういうことだ。」

あいつらの前で言ったら大騒ぎになるからな」

修の陽子に対する思いを知っているからこそ、

快は全てを打ち明けた。

だが、自分の彼女が監視されているのも、

あまり気分は良くないだろう。

「まっ、仕方のないことだな」

「なんだ、あまりショックを受けた感じはないな」

修の意外な反応に快は少し驚く。

「まあな。陽子に昼間聞いたからな。

向こうで任務に失敗して俺と連絡が取れなくなっただけでな」

「失敗って・・・陽子の性じゃないだろう。」

あいつの隊の隊長がミスって陽子は目を付けられたんだ。

連絡も取れなくなるほどのことなら親父が動くだろう」

快の言うことはあくまでも理論的だ。
しかし、修だから分かることもある。

「結論はな。だが、心はそうはいかないだろう。
あいつは生き残ったんだからよ……」

その頃、陽子は義臣に呼び出されていた。
それは尋問を受けるため……

「なるほど、これが三年間の成果か。
かなりの情報を提供してくれたもんだ」

「ええ、細胞バンクの支部ですから。
本部の情報を掴みやすかったです」

あくまでも調査報告に陽子は徹しようとしていた。
しかし、義臣がそれを見抜けないはずがない。

「陽子、今いくつの盗聴器が付けられている？
いや、術もあるんだろうが」

「さあ、わかりません」
「だろうな。だが、答えは簡単だ。
全て消せば数える必要はない！」

巨大な水泡が陽子を飲み込むと、
水泡は光弾けた！

「ゲホゲホッ……！」

陽子は噎せる。

そして泣いた・・・

「細胞バンクに宣戦布告だ。

三年前に何が起こったのか全てを話せ。

TEAM本社が動く」

義臣は宣言した。

第十二話：尋問

「・・・三年前、私達の隊が細胞バンクに潜入し、大きな過失をおかしてしまいました」

「ああ、俺の細胞と快の細胞があいつらの手に渡ったことだろう。だが、そいつは取り返したんだ。今更気に病むことなどないだろう」

その任務が翔達が遂行したものであった。

三年前、万が一自分の細胞が相手のものになったとしても、必ず日本の細胞バンク本部に戻るように策を練っていたのだ。

「それだけではありません。

確かに社長と快の細胞の分析は困難となり、三年間で解析することが支部では不可能でした。しかし、利用する方法を見つけたものがありました」

「風野博士か・・・」

翡翠の父である風野博士は、掃除屋界では天才科学者でその名を轟かせている。中でも

「デビル・アイ」の研究は、数力月前に崩壊した

「ブラッド」に大きな戦力をもたらしていた。

「はい、風野博士の研究のテーマの一つであった「クローン」。

それに快の細胞が取り込まれたのです」

「そしてどうなった？」

義臣の目つきが厳しくなる。

「実験は成功。」

快の細胞、いえ、能力を持つクローン人間が完成しました。その力は今の快を超えています。

「なるほど、そりゃ厄介だな」

義臣は笑った。

まるで全てを予想していたかのように……

「とりあえず、クローンは快に潰させる。」

オリジナルがたった一パーセントにもみたくない細胞に負けてた話にならない。

何より、風野博士の研究を利用している細胞バンクに、そろそろ制裁を加えてやろうと思っていたところだ。そうということだから覚悟しとけよ」

陽子の耳についていたマイクロサイズの盗聴器が、パチンという音を立てて潰れた。

「社長！」

「これで宣戦布告は終了。」

だが、陽子。

俺にはまだ気掛かりなことがある。

お前ほどの使い手が細胞バンクの支部で失態を犯すとは思えない。ましてや、あいつが隊長だったにもかかわらず、お前をここまで追い込めるはずがない。

三年前にお前の兄貴達は何をやらかした？」

陽子はピクリと動揺した。

だが、刺される視線は彼女を逃すはずがない。

「・・・兄達は、裏切られて殺されたんです」

「まさか！」

義臣はハッとした。

「そのまさかです。」

兄の、哲兄さんの婚約者でありチームメイトだった香に・・・」

第十三話：三年前のミッション

中学入学前、相川家の兄妹達は留学という名のもと、アメリカの細胞バンク支部に、潜入調査を命じられることになった。

「修、待っててね。」

手紙も書くし電話もするよ。
だから忘れないでね」

涙ながら陽子は言うと、
修は相変わらず不器用な態度で答えた。

「長年の幼なじみを忘れる阿保がいるかよ。
さっさとして行ってこい」

これが最後だった。
その後二年間、陽子にとって最悪の日々が始まる……

口元まで隠した黒装束。
まるで忍者のような出で立ち。
中学一年生の幼き少女を、
闇の世界へ誘った証だった……

「哲兄さん、学兄さん、
敵は眠らせて来たよ」

陽子は不適な笑みを浮かべた。

細胞バンク支部、任務はいたって簡単だった。
細胞バンクの細胞のデータを全て回収すること。
それを義臣に送ればよかった。

「香、地図は頭に入ってるか？」

「それを私に聞く？」

ふわふわの茶色のロングヘアの美女は、
膨れっ面をして答えた。

彼女が哲の婚約者だった。

「そりゃ、一番とちりそうなのがお前だからよ」

「私は立派なバスターです！

さっさとデータの回収に行くわよ！」

香は瞬身でその場から消えた。

「兄さん、あまりからかってやるなよ。
来年には結婚するんだろ」

学は少しからかう口調で兄に言うが、

「さあな、戻れるのが来年になればいいんだがな」
「どういうこと？」

陽子は不思議そうな顔をした。

そして、彼女の目の前に試験管が二つ出される。

「陽子、もし何かあれば敵にそいつを渡せ。
殺されることは決してない。」

バスターならいくらでも機転を利かせた理由が言えるな」

いつになく真剣な面持ちで哲は尋ねると、

「もしもの時でしょ。」

大丈夫、兄さんが隊長で失敗するわけがないわ。
それに私だって

「影」の一員なのよ。

簡単にやられるもんですか」

陽子はニツコリ笑った。

それに安心するかのように、
哲は微笑を浮かべると、

「じゃあ行くか。」

凄腕のバスターと一戦やらかしに」

眠らないバスターとの戦いが始まろうとしていた。

第十四話：裏切った女

細胞バンク支部。

迷路のような構造になっている館内は、

余程方向感覚がなければ迷ってしまう。

しかし、地図を見ている暇などバスターにはない。

そしてもし迷ったときには必ず相手の気配を感じ取る。

重要な場所ほど強い奴は出て来るものなのだから……

「お嬢さん、お困りかい？」

「困りはしないわ。道に迷わない限りね」

陽子はそつけなく言い放つ。

彼女が使った催眠術に応じなかったただけあって、

なかなかの気力を持つバスターであることは間違いない。

「そうかい。だが、俺はお嬢さんの抹殺が任務でね、

ここで死んでもらわなければ困るんだよ」

男はにたりと笑った。

「そう。だけど、私も任務遂行のためにあなたを殺さなければなら
ないわ」

「殺しを認めないTEAMが言っても説得力はないが」

「そうね、だけど」

「影」は殺しの許可が下っている。

全ては掃除屋の均衡を保つためにね」

そして舞い散る血の雨。
ほっておけば間違いなく死ぬ。

「なっ！」

斬られたことすら分からなかった。
しかし、自分は血を流している。

「あともって一時間。

私は子供だから直接殺したりはしない。
だからここで私と戦って寿命を縮めるかどうかはあなた次第。
動けば30分も持ちはないけど」

子供とは思えない冷たい視線が男に突き刺さる。
しかし、ここで男はその場に腰を下ろすと、

「酷なもんだな。

掃除屋という業種は任務のために命をかけなければならないとは」
「それが私達の成すべきことでしょ」

「いや、違うな」

男は懷から小髻を取り出し、
それを一気に飲み干すと、
見る見るうちに再生していく！

「再生能力……性質が悪いわね」

「いや、少しばかり違うな。

これはお前の一つ上の兄、相川学だ」

陽子は声を抑えた。

動揺を見せれば相手の思っ壺だ。

「ほう、やはり訓練は積んでいるようだ。
だが、これは信じるしかないだろう？」

カツカツとハイヒールの靴音が近づいてくる。
そして陽子は目を疑った！

「ごめんね、陽子ちゃん。
お兄さん二人とも殺しちゃったわ」

片手で引きずられた兄達の死体。
それを引きずっていたのが香だった……

第十四話：裏切った女（後書き）

お久しぶりです！ようやくこっちも書けました。楽しんでくださると幸いです。

第十五話：戦乱の予感

香と結婚すると決まったとき、哲はすごく照れた表情をして、学と一緒にになってからかった。しかし、二人の兄はもう息もなかった。

「掃除屋

「TEAM」。

裏切りには本当に弱いよね。

私がピンチと言えば疑いもなくやってくるし、婚約すれば骨抜きにもなる。

おかげさまで二人の細胞とエネルギー、バッチリ頂いたわ。

そういうことだから陽子ちゃんも死んでくれる？」

未だ理解できなかった。

頭の中は混乱していた。

だが、涙はなかった。

「香、その必要はない。

ボスの命令はこのお嬢ちゃんをスパイにすることだ」

「ライ、冗談は止して頂戴。

細胞バンクはTEAMの細胞を欲しがってるのよ。実験体が多いほうがいいのよ」

香は魔力を鋭い刃へと変える。

「そのお嬢ちゃんの力はまだ変化する。
四系統のどれにも当たらないものだ。
ここの所長として興味があつてね」

ライは陽子を実験体として見ていた。

体術・召喚・治療・自然系のどれにも当たらない陽子の特殊能力。
TEAMの細胞と言うだけでも魅力的だが、
その変化を記録することも研究者として逃したくはないのだ。

「だったら私にも何か頂戴。

なければこの子を今すぐに殺して私の研究材料にするわ」

「だったらこれをあげる」

陽子は快と義臣の細胞サンプルを投げ渡した。

「篠原義臣の細胞なら文句ないでしょ。

快の細胞だつてある。

私はまだ死にたくはないの。

TEAMのスパイにぐらになつてあげるわ」

ポーカーフェイスがこれほどきついものだとは思わなかった。
しかし、ここで自分に残された道は一つしかない。

「本物がどうかは怪しいけど・・・いいわよ。

確かにこれはかなりの力を持つものの細胞。
しっかりTEAMを潰すために利用してあげる」

香は最上級の笑みを浮かべた。

「これが三年前の裏切りです。

私は生き残るため、兄達の敵を打つため、TEAMの情報を奴らに流した。

社長、あなたの力と秘密も……」

「構わないさ」

義臣はまたもさらりと答えた。

「お前がやられっぱなしな訳がない。

そして俺の能力を奴らが全て解析出来るはずもない。
今回は俺も動く。

奴らが何をしてこようと、

お前を死なせたりはしないからな」

戦乱が始まろうとしていた……

第十六話：召集命令

壁に耳あり障子に目あり。

しかし、TEAMの場合は少し違う。

「屋根裏にバスターあり床下に悪ガキあり」となる。

「さて、そろそろ姿を見せたらどうだ？」

義臣は笑いながら言うと、

高校生バスター達は姿を現した。

「バレバレか。社長には敵わないな」

「だよね、ちよつとずるいな」

白真と翡翠は相変わらず勘のいい義臣には敵わないという表情を浮かべた。

「無理ないさ。咲だつて見付かったんだろ？」

俺達じゃ一発だ」

翔は冷静に分析した。

それに大地も頷く。

「まあ、お前らが来てくれてちよつと良かったよ。

お前達四人が今回の先発隊になつてもらう。

快達本隊が到着したら速やかに戦線から離脱。

その後研究室の破壊に回れ」

「ちよつと待てよ。」

俺達はいいとしても、翡翠は治療兵だろ。
先発隊に使ってもいいのか？」

白真がもつともなことを言うが、

「問題ないさ。それに聞いてただろう？」

今回は俺が動くんだ。

正確に言えば俺のチームが動くんだ。

勝算はありすぎるほどだ」

自信に満ちた顔は経験と絶対的な力から来るもの。
それを相手にするものが不幸としか思えない。

「だけどよ、お前ら期末試験の勉強してるのか？」

それを聞いた高校生達は固まった。

現実 is 厳しいものである。

「快様~~~~~!!!」

陽子を残し、高校生達は快のもとへと走り出した。

「陽子も勉強しとけよ。」

お前はバスターでもあるが、

あいつらと同じ高校生だろ」

優しい笑顔が心の中に染み渡る。

陽子は深々と頭を下げて、

瞬身でその場から消えた。

「ということになったから、
あいつらに連絡してくれる？ 夢乃さん」

社長室にある隠し扉から夢乃は出て来た。
彼女の気配の消し方は、
高校生バスター達に分かるものではない。

「それはいいけど、みんなに連絡とるのは厳しくない？
数人はまだ任務に就かせてるのでしょうか？」

かつて自分達とともに戦ったメンバーは散り散りになっている。
白真と翔の父親は連絡すらまともに取れない状況だ。

「ああ、あの二人は無理だが、
うちの料理長と時枝警視総監殿は動けるだろ。
そしてあいつもいけるさ」

「・・・苦労しかかけないのね。
また怒られるわよ」

夢乃は深い溜息をついた。

第十七話：テスト勉強

「だからさ、なんでお前らはテスト前になるとここに来るんだ？」

もはや快の部屋にテスト前に駆け込むことは、
中学に入学したときからのお決まりである。

快としては、修と大人しく勉強する方が楽でいいのだが、
そうさせないのが他のメンバーである。

白真に至っては、ほぼノリでこの部屋に来ている。

「まあまあ、快ちゃん！」

みんなでやった方が早く終わるよ。

何より楽しくていいでしょ！」

このノリで毎回学年ベストスリーに入るのが色鳥白真という奴である。

「白ちゃんの言うとおりだよ！」

大原ちゃんの数学の問題って難しいじゃない」

翡翠も意見する。

ちなみに翡翠も数学以外は学年上位である。

「そうだぞ。ほら、ここの英文なんて訳すんだ？」

「俺は文法そのものが分からん！」

赤点コンビの翔と大地はすでに快のノートを奪っていた。

「勝手に人のノート奪うな！」

「あら？ 快、ここの範囲今回追加されたの？」

紫織が自分ノートと見比べながら尋ねる。

彼女が来ることはまだ良しとしている。

自分が休んだときは、

紫織がノートを貸してくれることが多々あるためだ。

「ああ、いけるとこまでいきたいらしいからさ。

まあ、暗記が増えたただだから問題ないだろう」

「そうね。じゃあ化学のノートは貸しとくから、

リーディングのノートは借りるわ」

等価交換の成立に快は賛成派である。

「それより修ちゃん、

陽子と一緒に勉強しなくていいの？

今回誰も範囲教えてないんじゃない？」

おそらくそれはないが、

修と話をする機会を与えるために白真がついた嘘だろうと空気で分かる。

「心配するな。

あいつは頭の出来が違うからな」

「だったら行ってこい。

この数式の答えが違ってるからな」

快の指摘に全員がニヤリと笑った。

毎回満点しかとらない数学の問題を間違えることは、それだけ何かが引っ掛かっているということ。

「……隊長命令なら仕方ないか」

そして修は快の部屋を出て行った。

「あの二人大丈夫なのかな？」

翡翠が不安そうな声で言うが、

「大丈夫だろ。修は陽子が好きなんだからさ」

「快ちゃんがそんなこと言うなんて明日は雨かな」

白真が言ったとおり、翌日は雨になった。

第十八話：雨

通学はいつも翡翠と一緒にだ。

もちろんお互いに朝練がない日だが……

「本当に雨になっちゃった。

白ちゃんが言ったとおりになったね」

翡翠は笑いながら快に言うと、

当人は不可抗力とでも言いたそうな顔で答える。

「梅雨時なんだから仕方ないだろう。

それにしても、修のやつ陽子とうまくいったのか？」

昨日の勉強会以降、修の姿を見ていない。

いつものように警察からの任務に借り出されたからだ。

そして何より気掛かりなのが、

今回の任務に修は加えられなかったこと。

陽子が関わってるなら、

義臣の性格上、修を入れると思っていたのだが。

「わかんないな。

修ちゃん恋愛についてはほとんど話してくれないもんね」

翡翠の言うとおり、親友の快にすら恋愛については話してくれない。
い。

もともと、その方面を話題にすること自体がないとさえはない。
よっぽど困ったことになれば、

自然に翔達が動いてくれるせいもあるのだろう。

「だいたい、修のやつは焦ったことがなさ過ぎる。」

陽子みたいな良い奴に悪い虫が付かないわけもないだろうに」

「そう言えば先輩達に人気あるみたいだよ。」

陽子ちゃんと咲ちゃんのファンクラブ出来たんだって」

「龍二が間違いなく荒れるな・・・。」

咲の婚約者であるだけに、

龍二の荒れようが嫌でも浮かんでくる。

白真がそうだったように、

龍二も代表者を締め上げるだろう。

「話がそれたな。」

それより翡翠、お前に頼みがあるんだが」

「何？」

快が翡翠にものを頼むことなど滅多にないことだった。

「陽子の動向をしばらくの間見ていてほしいんだ。」

一応俺も警戒はしてるんだが、

何かあったあとじゃ遅いからさ」

本当は少しだけ違う。

陽子を見張れというのが任務。

しかし、それを伝えればチームワークが乱れる恐れがある。

「・・・分かった。」

だけど、快、私は信じてるからね。

陽子ちゃんのこともおじ様のことも」

「ああ、すまない」

雨は少しだけ勢いを増した。

そしてその頃、学校に来客者が現れる。

「篠原君、久しぶりだね」

学園長が懐かしそうな笑みを浮かべると、

「ああ、久しぶり！」

実はさ、少し頼みたいことが」

「もう少しその口の聞き方は直せんのか！ 篠原義臣！」

そして現れる快達の担任であり、
かつて自分達を受け持っていた大原が入室して来た。

「大原ちゃん！ ちょうどよかった。
頼みたいことがあるんだ」

大原は少しだけしかめっつらになった。

第十八話：雨（後書き）

しばらく放置してました、すみません！ いよいよ話もバトルに入り始めます。期待しててください（する人がいるのか！？）

第十九話：大原ちゃん

篠原義臣という男は、昔から掴みどころがない。
その男の頼み事となれば、当然厄介事だ。

「一体何を頼んでくる？」

「あつ、大原ちゃん相変わらず嫌そうな顔だ。
そんなことじゃ血圧上がるぞ」

「お前が上げたんだろっ！」

全く、教師生活二十四年でお前達ほど手のかかった奴らはおらん
！」

大原は義臣に文句をたれるが、
それはどこか嬉しそうでもある。

「まあまあ、その分息子はしっかりしてるから許してくれよ」
「佐原に似た性だろうな」

「佐原」は夢乃の旧姓である。

「まあな。それでさ、大原ちゃん、瀬野の行方知らない？
俺達の情報網でもあいつは捕まらないんだ。」

「・・・TEAMの情報網に引つ掛からないとは瀬野らしいが、
息子はどう思ってるのかね」

大原は溜息をついた。

息子の瀬野龍二は、おそらく物心つく前に父親が行方不明になっ
ている。

その理由は未だ龍二に語られていないが……

「龍二はまっすぐ育ってるよ。

で、どうなの大原ちゃん」

「……おそらくエジプト辺りだろうな。

ただし、三日前の情報だ」

「充分だ。どうもありがとう」

義臣は瞬身でその場から消えた。

「やはり忙しそうですね、篠原君は」

学園長は穏やかな笑みを浮かべていうと、

「少しだけ焦ってる感じにも見えました。

おそらく、瀬野まで召集をかけなければならない事態なんでしょう。」

細胞バンクが絡んでると聞いていますからね」

「……そうですか。

ですがうちの卒業生なんですから大丈夫ですよ」

学園長はお茶を一杯飲んだ。

その頃、修は一つの真実にたどり着いていた。

「何なんだよ、このデータ」

細胞バンクから届いたのであるう、

一人の人間のデータを見て修は青くなる。

「デザインチャイルドというものだ。
お前がよく知ってるお仲間だろう」

「誰だ！」

修は背後からかけられた声に対して殺気を放つ。

「私か？ アメリカの細胞バンク支部の所長だ。
名はライ・タナーと言う。」

博学な時枝修なら聞いたことはあるだろう？」

「……なるほど、生物学者ならこいつを造れそうだ」

修はあくまでも冷静をよそう。

こんなことが現実になつていいはずがない。

「そうだな、まさか私の研究をTEAMが取り入れていたなんて知らなかった。」

篠原義臣はやはり天才と言うわけだ」

ライは不敵に笑った。

第二十話：影の部隊長

信じられない事実は目の前にある。

それを本当に自分達のボスがやったなんて思いたくはない。

「ライ・タナー。おしゃべりはそこまでにしてください」

「咲……！」

突如その場に咲が現れる。

黒装束の出で立ちから影の任務で来たことは明らかだ。

「これはこれは、和泉咲嬢。

影の部隊長自らお出ましとは」

「社長の命令だからです。

ライ・タナーを始末せよとの司令が下りましたから」

修は息を飲んだ。

その殺気はとても自分が入り込めるものではなかった。

咲が影に所属している以上、分かってはいたことだが……

「なるほど、確かに本気らしいが私もここで終われなくてね。

そこにいる時枝修の細胞が必要だからな！」

高らかな金属音が響き渡る！

ライと咲の短刀が交じり合った。

「修さん！　すぐにこの場から逃げてください！

瞬間移動だけは使わないでくださいね！」

「ああ！　すぐに増援を連れてくる！」

開け放たれていた窓から修は飛び出した。
あの場に残っても自分が役に立てることはない判断できたからだ。

「あの程度のスピードなら！」

ライは修のもとへ移動しようとしたが、咲がそれをさせない。
時空使いだからこそ出来ることがある。

「言っただけです。」

修さんのもとへは行かせません。
あなたの時空間移動は私が封じ込めます。
タイムルーム！」

咲とライを取り巻く時空間が歪む。
簡単に言えば、時間の感覚を無くしたということだ。

「なるほど、確かにこれでは時枝修を追い掛けられんな」

ライは咲に向けて殺気を放つ。
それは獲物を奪ったものに対する獣のようだ。

「・・・ようやく本性が現れてくれましたね。
私も手加減するわけには参りませんね」

咲は直槍を取り出した。
それは時空の中に閉まっている彼女の武器だ。
時空タイプが無敵の強さを誇るのも、
いろいろな戦い方を併せ持つものが多いからだ。

「なに、今ここで取り逃がしたとしても、影の部隊長殿が代わりにサンプルとなってくれる。それもまた魅力的なんでね」

次の瞬間、咲は左に跳びライの攻撃をよける。

「ほう、いい判断だ」

ライが触れた床は見る見るうちに溶けていき、それはライのエネルギーへと変わる。

「溶解術……噂通りですね」

「そういうことだ。咲嬢」

ライは不気味な笑みを浮かべた。

第二十一話：元・影の総隊長

「メルト」

「くっ！！」

咲は紙一重で避ける。

いくら時空系といえども、

相手が自分を上回る力を持っていれば強敵となる。

ライは様々な人間の細胞をエネルギーに変えて来たと同時に、その能力までも身につけていた。

「相手の時間を支配できない気分はどうかな、咲嬢？」

「最悪です。敵なら尚更ですね」

それだけ答える余裕があつたのはさすがと言うべきだった。影の部隊長の実力は相手と冷静に戦うスキルも要求される。

「実に結構な答えだ。

しかし、その細胞を頂く！！」

「きゃあ！！」

乙女らしい叫び声が響く。

しかし、それが罠だとライはすぐに見破った。

「咲嬢、そんな幻術など私には効かない！」

「くっ！！ リターン！！」

溶解する手が咲の肩に触れた直後、咲は時間を巻き戻し肩を元に戻す。

もちろん、ライの奪ったエネルギーも無効化される。

「すばらしい能力だ！ さすが影の部隊長殿だ！
その細胞を寄越せ！！」

まるで獣のようにライは咲に飛び掛かって来た！

「させません！ ストップ！！」
「うっ！！」

ライの体は制止する。
その隙について咲は銛を換装する。

「散りなさい！」
「かかったな」

皮肉な笑みが咲に恐怖を与えた。
そしてライの欲望を満たす光景が浮かび上がる。

「その細胞、確かにいただいた」

自分の体が少しずつ溶けていく。
時を支配する力がない・・・

「時空系といえども点穴をつかれては魔力は出せない。
だが、私は優しいほうでね、
遺したい言葉だけは聞いておく主義だ。
お前は何を遺す？」

虚ろな意識の中で咲は答える。

「あなたに勝てる人が後ろにいます」

「なっ！！」

咲はライの手の中から消える。

そして助けた人物の手の中にいた。

「全く、義臣の奴も大原ちゃんも人使いが荒いもんだ。

高校生バスターが手に負えるレベルじゃないだろうに」

飄々とした、しかしどこからか恐るべき威圧感が溢れ出している男がライを見ている。

掃除屋界でかつて篠原義臣の部隊で暗躍していた男、そして今回召集された元・影の総隊長、

「瀬野龍一！！」

「ああ、正解だ」

瀬野龍一の父親だった。

第二十二話：土

まずい予感がしていた。

珍しく咲とは違う任務につかされていた龍二は、

TEAM本社に戻った途端、

息を切らして戻って来た修から咲のピンチを聞かされたのである。
そして闇の中を四つの影が走り出す。

「もつと飛ばせ！！」

咲が殺されたら殺した奴を灰にしてやる！！」

とても影の部隊に所属しているとは思えない言動だが、
それだけ咲のことが大切だと友人達は知っている。

「落ち着け、龍二。相手はライ・タナーだ。」

冷静さを欠けば足手まといにしかならないだろう」

快は冷静だった。若干の焦りは見えるが、咲の実力を知らないわけではないからだ。

そして幸運なことに、治療兵である翡翠が同じ部隊にいれば、
咲が重傷でも命だけは取り留めることが出来る。

「龍二、咲は殺されていないことだけは確かだ。」

だが、とんでもない力を持った奴が乱入してやがる」
「修ちゃん、この力の持ち主は敵なの？」

翡翠は不安そうな目をして修に尋ねるが、

「いや、敵とは思えないな。」

何と無くだが、社長に似た感じがする」

そして、その力の持ち主は余裕そうな表情でライを見ていた。

「瀬野龍一……!!」

「飢えた目をこっちに向けるな。」

まっ、俺も考古学者だから研究対象に関する興味を抑えられない
気持ちは分かるが」

カラカラと龍一は笑う。

少し苦しそうな息をしながら、咲は龍一に尋ねた。

「おじ様、どうしてここに？」

「ん？ 義臣から聞いてないのか？」

細胞バンクを潰すために召集がかけられたことを」

たたき付ける覇気が味方にさえ恐怖を与える。

元・影の総隊長の実力は健在である。

「……篠原義臣もだいぶ焦っているようだ。」

一体何を知られるわけにはいかないんだろうな」

「お前だって知らない癖して偉そうにするな。」

あいつの隠したいことはそのまま闇の中に置いときやいいんだ。
余計な詮索はする必要はない。

そしてそれが嫌なら」

パチンと指を鳴らした途端、ライの体が土に変わっていく！

「なっ!! 幻術か!!」

しゃべる口までが少しずつ土になっていく。

「いや、それは現実に起こっていることだ。

お前は溶解術を使うなら分かるだろう？

この世には人間を他の物質に変えることが出来るってよ」

もはやライはしゃべることさえ許されなくなった。

そして龍一はライから背を向けると、

「永遠に消えろ」

ライは土になった……

第二十三話：対面

「ここから先は我々影の管轄です。
戻っていただけますか、快様」

咲を助けるために急いでいた四人は足止めを喰らった。
TEAM特別部隊の影。

そのメンツは龍二も会ったことがない者達だった。

「断る。咲は確かに影の部隊長だが、
今回は俺達と同じバスターとして動くんだ。
いくら社長命令でも聞くわけにはいかない」

快は凜とした態度で言うが、
影達はそれを聞き入れはしない。

「快様、社長命令を着実にこなすのが我々の使命。
どうしてもというなら気絶していただきます」
「そんな物騒なことやるな。
義臣の命令なら俺がかたを付けたはずだからよ」

突如はいってきた声に、影達は片膝立ちになり頭を下げる。

「龍一おじさん！」
「親父！！」

その場にいた者全てが驚きを隠せなかった。

「お前達はすぐに次の任務に移れ。」

事態は思ってた以上に厄介なことになってるからな」

元・影の総隊長は厳格な表情で命令を下した直後、影達は闇へと消えていった。

「さて、久しぶりだな。龍二」

「・・・咲を助けたんだろうな」

少し不服そうな顔をして龍二は父親と向き合つと、

「ああ、だが今度の任務には参加させられる容態ではない。今、夢乃が集中治療を施してるから命は助かるだろうが」

命が保障されたというだけマシといえばマシなのだが、

義臣が力を見誤るような任務を咲に与えたという時点で快は不振に思った。

「龍一おじさん、社長は何を焦っている？

いくらなんでもらしくないんじゃないか？」

快の意見はもつとも。

高校生バスター達は龍一に詰め寄るが、

「快、確かに今回の咲の任務は奴の判断ミスだ。

だが、ライ・タナーの本来の実力は間違いなく咲以下だった。

咲の時空魔法を破れるものなど掃除屋界でも数少ないからな」

敵の能力を熟知しないかぎり義臣は一人だけに危険な任務を与えない。

しかし、それでもここ数日の義臣はどこか余裕が見られないのだ。

「龍一おじさん、本当に親父は大丈夫なのか？」

滅多に見せない快の不安そうな顔は、

龍一ですら少しは何か伝えてやりたいと思わせるが、

「快、お前は知らなくていい。

今回のお前の任務は細胞バンクの壊滅だ。

ただそれだけに力を注げ。

そして修、お前が咲の代わりに快のチームに入れ」

夜はまた深くなった……

第二十四話：義臣の決断

物心付くころには父親は行方不明、

いや、正確に言えば遺跡発掘のために世界を放浪してた。

写真は見えていたからすぐに父親だとわかったが、

いきなり現れて自分の大切な婚約者をさっさと助けて、

現在社長室に閉じこもっているのである。

「面白くねえ」

「そう怒るな。気持ちとは分からんでもないがな」

苛々している龍二を快は冷静に宥める。

しかし、宥めている本人も決断していい気分というわけではなかった。

社長室に盗聴器でも付けてやりたいところだが、

ちゃんぽらんながらも最強の男がそれを見破らないわけもないのだから……

「だけど、何話しているんだろうね」

「今度の作戦が失態の反省つてところだろう。」

それに俺達に聞かれたくない影の内容かだな」

修の予想は半分だけ当たっていた。

「よく集まってくれたな、脩三、龍一、太陽、そして夢乃さん」

最後だけ間違いなく愛妻家の声のピントが上がった。

この場に集まったのは修、龍二、大地の父親達である。
かつて最強のバスターとして掃除屋界にその名を轟かせた人物達だ。

「まったく、こっちはとくにバスターを引退した身だって言うのに、

大原ちゃんの情報網まで利用して探すなんてなんてひどい奴だ。
世界の遺跡が俺を待ってるって言うのによ」

龍一は高校卒業とともに遺跡探索に出た男である。

影の総隊長の役柄は義臣が放浪するついでに与えたのだ。

もちろん、影は総隊長不在で少しばかり混乱したわけだが……

「まあまあ、そう文句言っなよ。」

こっちだってそれなりの事情があって呼び付けたんだ。

俺達の息子がクローン人間として存在している可能性があるから
な」

「……風野博士の研究が使われたのか？」

脩三の問いに夢乃は俯いた。

細胞バンクが義臣と夢乃の子供の細胞を手に入れるチャンスは一度だけ。

八年前、流産した男の子がどのように処分されたかなど知りたくもない。

しかし、細胞バンクにとっては絶好の研究材料になったのだろう、容易にその子の細胞を手に入れ、あとはクローン人間を造るだけとなった。

「ああ、陽子の様子からも間違いない、風野博士が研究していた人間兵器として造られたクローンだ。」

だが、その暴走は快に止めさせる」

部屋の中にいた全員が驚きを隠せない。
いくらこの内容を伝えなくても、
自分の弟を始末しろといっているのだ。

「苛酷な任務だとは分かってる。

だが、あいつに任せるしかない」

重い決断だった。

第二十五話：土気

何があってもTEAMに降り注ぐ災厄を振り払うのが社長の務め。それが八年前の自分の失態を實の息子に拭わせることになってしまった。

「今回の任務、やっぱり快には荷が重過ぎると思うわ」

夢乃の言うことは正論だった。

TEAMは殺しを認めない掃除屋であるが、その精神を貫くことと自分の身を守ることの狭間に高校生バスター達は置かれるのである。

しかも気にしていたであろう、生まれるはずだった弟を始末させようというのだから……

「夢乃、俺は全てが終わった後、快に伝えるつもりだ。

クローンのことも細胞バンクのことも、

そして風野博士の研究がどのようなものだったのかもな」

夢乃の表情が曇る。

快は強い子に育ってはくれた。

しかし、まだ高校一年生だ。

本当に全てを受け入れられるか心配ではある。

「快に全てを話してあげなくちゃだめなの？」

「いつかはたどり着く真実だ。

それにあいつはわかってくれるからな」

義臣は夢乃の手に自分の手を重ねた。
しかし、それでも夢乃は不安だった。
今まで築き上げて来た平和が、
一瞬のうちに消える気がしたからだ。

「あいつは全て乗り越えてくれるよ。
それに奇跡が起こる可能性がありそうだしな」

義臣は微笑んだ。

そしてもう一つの問題がTEAMの食堂で起きていた。

「龍二、十三年ぶりに帰って来たんだから少しぐらい話すこともあるだろう。」

チームメイトの事とか剣道の調子とか、咲ちゃんとかこれまでの関係になったとか」

「ウルセエ！！ 十三年もおふくろほつたらかしにして親父づらすんなー！！」

周りにいた社員達が二人に注目する。

龍二のいうことは最も。

普通ならここで殴るかうなだれるかが父親の定番なんだろうが、

「スマン！ 確かに母さんはいい女なんだが、俺は遺跡の誘惑に弱くてな。」

おもいつきり浮気していた！」

軽く謝り、理由まで分かりやすく答える父親が果たしてこの世に何人いるだろう。

「ふざけんな!!」

「ふざけてない!! 俺は常にやりたいことには本気だ」

威圧した。龍二が何も言い返せないほどの覇気で。

「……龍二、影にいるならいつか分かるときが来る。
今回の任務、お前が考えてるほど甘くはないぞ」

そして龍一はすつと立ち上がると、

「全員に伝えておく。

俺はこれよりTEAMの戦闘指揮官となる。
今回の案件、心してかれ」

TEAM全体が引き締まった。

第二十六話：小さな笑み

戦闘指揮官と言えば快達の表のチームと影を統括し任務に当たる隊長のこと。

分かりやすく言えば、TEAMの上から三番目のポジションだ。

「すごいね、龍一おじ様。

いきなり戦闘指揮官になっちゃうんだもん！」

無邪気に笑う翡翠とは対称的に、快はこの人事に間違いなく説教をするはずの人物の事を考えて重くなっていた。

「鬼の副社長が戻って来たら何と言うか……」

義臣の暴走を止められる副社長は数ヶ月間不在である。しかし、TEAMのピンチは伝わっているはずだ。戻って来ても良さそうな気もするが、

「大丈夫だよ、快。龍一おじ様は凄腕のバスターなんだもん。さっきだって皆の士気が一気に高まってたじゃない」

翡翠の言う通り、あの威圧感と戦闘能力は戦闘指揮官になっても不思議ではなかった。

「ああ。まあ、そうなんだろうがやっぱり腑に落ちない点がいくつかあるんだ。

細胞バンクの任務は親父達が出るまでの案件になってる。

だが当人達は先発隊にも本隊にもならない。援軍にしちゃ強すぎる」

「確かにそうだね」

二人の話に紫織が書類をもって入って来た。

「快、社長から今度のチーム編成と援軍リストを預かって来たわ。作戦決行は明日の正午になった」

二人は驚きを隠せなかった。

快は急いでリストに目を通す。

「・・・紫織、お前が援軍か」

「ええ、残り三名は治療兵の編成ね。」

戦力の増強は期待しないでちょうだい」

ありえない事だった。

しかもその三人の治療兵は全員下っ端。戦闘スキルはほとんどない。

「なるほど、これで確定したな」

快は珍しく冷や汗をかいた。

「今回の任務、俺達が捨駒だ」

「捨駒っておじ様はそんなことしないよ!」

「快、私もそう思うわ。」

きつと私達にも言えない重大な事があるのよ」

翡翠と紫織は否定するが、

しかし、親子だからこそその考えを理解してしまう。

「ああ、俺もそう思いたいが、どうも今回の親父はおかしい。それを信じる方が難しい状況ばかりなんだよ」

「だけど信じなくちゃ」

翡翠が真つすぐな目をして快と向き合う。

「社長の命令は絶対なんですよ。

快だって隊長なんだからそれぐらい理解してるはずじゃない。

もちろん咲ちゃんの事もあったし、私達に話してくれないことも多い。

だけど、最後はいつも裏切らないじゃない。

快は知ってるでしょう？」

とびきりの笑顔には敵わない。

紫織の小さな笑みが快の心を表していた。

第二十七話：先発隊の実力

緑に囲まれた細胞バンク。

いかにも研究所という造りの建設物の数々。

そこが今から血の海へと変わっていくのである。

「さあ、久しぶりの先発隊だ」

白真は楽しそうに肩を回した。

先発隊は好き勝手に破壊できる特権を与えられている訳でもないが、

それと同様の事は出来るわけではある。

「隊長、あまり油断するなよ。」

今回は治療兵までが先発隊に入れられてるんだ。

何があっても無茶はやるな」

翔は白真に告げる。

今回の先発隊は白真が隊長であり、

その下に翔、大地、翡翠がついている。

決して弱くもなく、実に安定の取れたチームではあるが、

白真を除く三人は多少警戒していた。

「大丈夫！ 翡翠は無理させないって！

攻撃補助が任務なんだし、

怪我させたら快ちゃんに何て言われることか……」

ぞつとするという感覚はさすがの白真にもあるらしい。

しかし、それを聞いて何も理解してないのが翡翠らしい。

彼女の頭の中では、治療兵が怪我をしてはいけないという使命からだとは思いが働いていない。

「まあ、行こうか。」

大地、翔、先制攻撃の準備は？」

白真の問いに二人はニツとして、

「すでに完了だ」

その瞬間、地面が崩れ、さらに突風が木々を倒していく！
大地と翔の魔法だ。

「さらに追加だ」

召喚剣士である白真は風に火を乗せ火災を起こす。

「あゝやり過ぎたかな」

やれやれという表情を白真は浮かべるが、

「問題なさそうだ。敵さんもやつぱり立派な掃除屋みたいだし」

周りにはいかにもベテランのバスター達がズラリと四人を取り囲んでいた。

「TEAMと聞いていたが、どうやら篠原義臣が直々に動いてるわけではなさそうだな」

決してなめられているわけではない。

長年の経験がそう告げさせていることも分かる。
しかし、その考えが隙を生む。

「ねえ、やっぱり社長って予知能力者なのかな」

翡翠の表情はすごく嬉しそうだった。

取り囲まれたというのはピンチの一つでもあるのだが、
それすら上回る喜びがここにある。

「間違いない。翡翠、頼むぞ」

「うん！ ヒート！！」

そして起こる三人の少年の電光石火！

いつも以上の力を体の負担にならないように引き出す翡翠の攻撃
補助の魔法。

義臣が彼女を先発隊に入れたのはそのためだ。

「TEAMつてのは篠原義臣が組織してんだ。
お前ら程度の力で勝てるわけがないだろう」

わずか一分で戦闘は終わっていた。

第二十八話：迷子発生

TEAM本社。

山岡優奈は今頃細胞バンクで戦っているであろう、恋人の大地や同級生達の事を思い浮かべながら、

別の任務に出立するところであった。

掃除屋という家業上、他の依頼も無視できないのである。

「優奈、あいつらが気になってるようだな」

「氷堂さん」

後ろを振り返れば、隊長の氷堂仁が立っていた。

「ええ、さすがに不安です。もちろん、信じてはいますけど」

ポニーテールがさらさらと揺れる。

「そうだな。だが、こっちも気は抜けないんだ。

さっさと終わらせた場合、別の任務に当たる予定だからな」

仁の口元が少し吊り上がった。

そして同時刻、快のチームが戦火上がる細胞バンクを見下ろしていた。

「快！ 早く突入させやがれ！」

「まだだ！ 白達が戦線離脱してないだろう！

お前本当に影に所属してんのかよ！」

快のツッコミはもつとも。

冷静なのは修と陽子のみである。

とはいえ、陽子も反旗を翻した立場に立っているため、若干の余裕はないようにも見える。

「まったく・・・もう一度作戦を説明するぞ。

今回は俺と陽子はクローンの破壊、そして修と龍二は各重要人物と交戦。

まずくなったら即時に戦線を離脱すること。特に龍二、深追いするな」

釘を刺すあたりはさすがは快というところ。

任務成功率を上げるためには小さな事ほど逃さない。

「分かってるよ。それよかあいつらが出て来るのも遅くねえか？」

龍二の問いに修は冷静に考え出す。

「細胞バンクって迷路みたいな構造だよな」

「ええ、白や翔は方向感覚完璧だけど、翡翠と大地は平気なのかしら・・・」

言われてみて気付く事実はある。

おそらく天然迷子と地図を覚えてない奴が一名・・・

「今すぐ行くぞ！ 突撃だ！」

本隊のはずなのに先発隊の援軍として快チームは任務を開始することになった。

そして、その予想は見事に当たっている。

「ここはどこだ……」

大地は見事に迷っていた。

とはいえ、天井さえ壊せば何とかなるため、
そこまでの危機感はない。

「白達が第四研究所の細胞を回収してるはずだから、
俺はその隣の第三辺りにいるはずだよな」

その曖昧さが非常に危ない。

しかし、何度かの襲撃にかすり傷一つも負ってないのは幸いである。

「とりあえず、あの辺の部屋にでも入ってみるか」
「それは困る。大切な臓器が保管されているのでね」

大地は声のする方に振り返った。

第二十九話：勝率

「切り裂き魔？ あの最近噂になってる？」

先発隊出立前、快は今回の重要人達の写真を高校生バスター達に見せた。

「ああ、名前は岩崎政一。元軍医で人体実験を行っていた第一任者だ。

その腕を買われて細胞バンクに入ったらしいが、掃除屋界では切り裂き魔として有名だ。

先発隊はもしこいつと遭遇した場合、出来るかぎり逃亡を第一とする」

「ええっ！ 敵前逃亡なんて剣士の道に反するよ！」

白真はおもいつきり駄々をこねるが、

「先発隊だろ。少しぐらい我慢しろよ」

「いや！ いいえ、言うことききます……」

快の殺気にあてられ、白真は大人しくなるのだった。

「で、俺はどう逃げたらいいのかな。

ここの破壊も任務のうちなんだが……」

大地は考える。一応、実力の差は多少ありそうだが、闘って勝つ確率は六十パーセントはありそうだ。

「いいねえ、君は健康そうだね」

「そりゃコックだからな。栄養バランスとれた食生活はしてるんでサラリと大地は答える。」

「そうかい、それは私のコレクションに是非とも加えたいね、橘大地君」

「へえ、俺も結構有名人なのかな？」

大地は少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「一応ね。君のお父さんはかなりの有名人だったから調べておいたんだよ」

「さいですか」

何かとあれば出て来るのが父親である。

致し方ないことと言えば納得するしかないのだが。

「だから興味を持ってね。」

橘太陽の息子ならかなりいい実験材料になりそうだ」

「……俺は調理の具材だよ」

「医者にとってはな！！」

岩崎は襲い掛かって来た！

「土壁！！」

自分に直線に向かって来た切り裂き魔は、メスを土壁に突き刺す状態になった。

「自然系のバスターか」

「端くれだけどな」

「確かに」

大地は土壁に亀裂が入り始めたことをすぐに見抜いて高く飛び上がる！

「脆い壁だ」

土壁が簡単に崩された。

「なんかショックだな」

空中で体勢を整え、岩崎から一定の距離をとる。

「ほう、身のこなしは良いようだな」

「体育の成績だけはいいいんで」

大地は微かに笑った。勝率は半分以下だとようやく気付いたのである。

第三十話：ルーレット

勝率半分以下の戦闘に勝つ方法はあると言えばある。
一瞬の隙について大どんでん返しを狙うか増援の到着まで粘るかだ。

しかし、橘大地には間違いなく両方の可能性が低い。

「うおっ！」

辛うじて岩崎のメスをよける。
勝率はもはやゼロに近かった。
体力が少しずつだか失われていくことを大地は感じていた。

「思ってた以上にしぶといね。
新しい研究材料としてはもってこいだ」

「へっ、細胞バンクお抱え医者の実験材料なんて死んでもゴメンだ。
あんなもの医者として造る手助けなんかするもんじゃない」

微かに大地は笑った。

「ほう、高校生バスターとしてはよく知っているな。
橘太陽からの情報か？」

興味深そうに岩崎は尋ねる。

「いや、俺は昔っから情報収集は得意分野なんだ。
社長達が何も教えてくれないなら自分でつかみ取るしかない。
そしてようやくここに来て真実に辿り着けた。
おまえ達は快のコピーを造り出したんじゃない。」

快の弟を作り出したんだろ、しかもれっきとした人間をな！」

岩崎がにんまりと笑った。

まさに大地の言ったとおりだった。

「素晴らしい！ここに侵入してそれだけの情報を集めていたか！
一体どんな能力を持っているんだい？」

歓喜きわまりなく岩崎は叫ぶ。

侵入した場所に入っただけで情報を掴む能力など滅多にない。

「簡単だ。呼吸をしているものから情報を得てるだけだ。
ただし、自分より明らかに強いものからは感じ取ることが出来ないが」

「なるほど、だから私の弱点は聞き取れないわけか」
「いや、それも違う」

大地はスツと腕をあげた。

「俺の直感は勝率二十パーセントとなってる。
どんでん返しを狙うのも得意じゃない。
だが、俺には運の良さっていうものがある。
生まれてこのかた、俺は大吉しか引いたことがないんだ」

快辺りがいれば運の無駄遣いと言っだろう。

「そうか、だが幸薄い人生だったようだ」
「それも違う。俺には出来過ぎた彼女がいるし、
料理の腕もこの歳で厨房に立てるぐらいだ。充分幸運なんだよ。
だから今回も運に任せてみようと思ってるね」

大地はニツと笑うと、一気に力を上げた。
そして地面にルーレット版が映し出される。

「全ては運次第。命懸けのルーレットだ。

負ければその場で命を絶たれる召喚術だ。
俺の運とあんたの運、どっちが強いかね」

大博打の始まりだった。

第三十一話：動き出したチーム本隊

死神などというものは一応この世に存在している。
ただ、掃除屋界のなかでと修正しておくべきだ。

「……いいゲームだね。」

私も今まで何度も命の危機に曝されたが、
ここまで命懸けで向かってくるものはいなかったよ。しかも運任せだね」

岩崎はほくそ笑んだ。

そして大地も笑みを浮かべる。

「俺もだ。何度もこいつを使ったことはあったが、
ここまで恐怖にかられたことはない。」

勝率百パーセントじゃなければ使っちゃいけない禁術だからな」

「人殺しの召喚だからか？」

「ああ、力の加減は出来そうにないことも明白だからな」

大地は汗が背中を伝っていくことを感じていた。

いつも以上の緊張から来る事だけは分かっていた。

「だが、今回ばかりは綺麗事すら言えない。勘弁してくれよ」

話はそこまでだった。

死のルーレットは回り始める。

一秒、一回転が互の心臓に悪影響を与えている。

そして針は止まった。

「・・・勝ちだ」

「へへっ、俺の負けかよ」

大地は笑った。そしてルーレットは消え、死神が大地に向かってくる。

「残す言葉を言え」

死神は大地にたずねる。

「普通なら礼を述べたり、愛しいものに何か伝えるべきだが、俺の願いはただ一つ。あいつを倒してくれ」
「承知した」

そして死神は岩崎の方を向く。

「主人の最後の願い、お前の命も頂こう」
「何っ！」

一瞬で岩崎の胸は貫かれる。
さらに大地の胸も貫かれた。

「馬鹿な・・・！」

「相打ちだ、馬鹿野郎・・・」

二人の意識はそこで絶たれた・・・

その同時刻、義臣のチームが動き出す。

「長かったな、ここまで」

義臣はそう呟く。

言わんとしていることは分かる。

「ええ、翡翠ちゃんを預かって十六年も経つんだもの。だけど、ようやく二人を会わせてあげられる」

夢乃はニコツと笑った。

それは今回義臣達がもつとも重要視していたことを表していた。

「ああ。だが、この任務をしくじればまた掃除屋界は大荒れだ。

おそらく予想以上の妨害に遭うだろうが、必ず助け出せ。あいつをな」

義臣達の任務が始まった。

第三十二話：翡翠激怒

義臣のチームが動き出した頃、迷子になっていた翡翠も大ピンチを迎えていた。

しかし、やはり治療兵なのか、攻撃を避けるだけ避けているためにかすり傷すら負ってない。

「しぶとい小娘だ。さっさと我々の研究材料になれ！」
「絶対嫌よ！」

翡翠を追いかけているのは細胞バンクの医療兵だった。主に細胞バンクの研究材料をかき集めることが仕事だが、緊急時には戦闘のスペシャリストとして戦う。

だが、やはりTEAMのメンバーの細胞は喉から手が出るほど欲しいのか、

私情を絡めた戦闘が繰り広げられている訳である。

「とにかく外に出なくちゃ！」

逃亡することが治療兵にとっては第二任務になる。しかし、翡翠の天然迷子ぶりは普通ではなかった。

よりによって、今回快達のチームが破壊を目的といていたクローン技術の核に来ていたのである。

「まずい！ 攻撃をやめろ！」

医療兵達は一斉に攻撃を止めた。中にあるのは自分達の宝だ。

一応、それなりの耐震技術等は備わっているが、

リスクを負うつもりもない。

「この中から逃げられるかも！」

翡翠はロツクのかかったドアをおもいきり吹き飛ばす。

そして上に出るために屋根を破壊しようとしたが、

飛び込んで来た光景に翡翠は愕然とした。

医術に携わるものなら何があってもやってはいけないことがある。

「やめてくれ！ 俺を殺してくれ！！」

「いやあ！ 私の手足を返して！！」

「怖いよあ！！」

翡翠は幼き少年の元に走った！

今にもそのからだバラバラにされそうだったのである！

「危ない！ 気功！！」

切断機が破壊されるが、その隙が命取りだった。

翡翠の背中が撃たれていたのである。

「せつかくの材料を無駄にしないでくれないか？

そいつは稀血の持ち主でね、怪物を作るには必要なんだよ」

しれっと言う医療兵に、翡翠はブチ切れた。

「細胞再生」

撃たれた背中が一瞬のうちに綺麗になる。

「なっ！ 馬鹿な！！」

「馬鹿はあんた達よ！ 医術に携わるものなら何があっても人体実験はやつてはならない禁忌！

あんた達には生き地獄を見せてやる！」

そして一瞬だった。

翡翠は追いかけて来た医療兵達の腕に軽く触れた途端、

「ぎゃあああ！！！」

医療兵達の筋肉はずたずたに切り裂かれた。

「しばらく倒れてなさい！」

翡翠はこれでも加減していたのである。

第三十三話：SHIN

泣いていた少年に翡翠は近づく。
幼い少年はともかわいらしく、ギュッと抱きしめてやりたい気
持ちになった。

だが、気付いたことがある。

「ねえ、君の名前は？」

「僕？　僕はSHIN」

SHINはニツコリ微笑んだ。

翡翠ははっとした。

「快……」

「その通りよ。その子は社長と夢乃さんの子供、そして快の弟」

翡翠は後ろから聞こえた声に安堵した。

「陽子ちゃん、脅かさないでよ」

少々翡翠は涙目になったが、
さらに混乱に陥ることになる。

「翡翠、死にたくなければその子を見たことを快には言わないで」

恐るべき殺気を陽子は二人に叩き付ける。

「どうして？　陽子ちゃん？」

翡翠はSHINを庇った。SHINも陽子に怯えている。

「翡翠、どきなさい！ その子は造られた快の弟なのよ！
ここで教育されれば間違いなくTEAMの災厄になる！
それに快にその子を見せたらどれだけあいつが傷つくと思ってる
の！」

「造られていても人間なんですよ！
だったら私はどかない！ 絶対に守る！」

治療兵として、人としてどくわけにはいかなかった。
何がなんでも守らなければならぬと思ったのだ。

「だったら！」

陽子は翡翠に斬り掛かる！
だが、それを止めた人物は現れた。

「まさかお前が裏切るなんて思わなかった、陽子！」

修は冷たい目を向けた。
それは初めて仲間に向けられたものだった。

「覚悟しろよ。俺は仲間でも、
裏切りを許すお人よしじゃないんだ」
「修ちゃん！ 違うよ！ 陽子ちゃんは！」

翡翠は必死に陽子を庇おうとしたが、
もはや二人にかける言葉もなかった。

「修、やっぱり社長から私は疑われていたのね。」

私がSHINを破壊しようとしていたことが洩れていたとは思ってたけど」

陽子は悲しい笑みを浮かべた。

「ああ、細胞バンクの情報はしつかり盗ませてもらった。

この子が八年前、社長夫妻の子供として生まれてくるはずだった子供となんだろう？」

「えっ……！！！」

翡翠は混乱した。生まれてくるはずだった子が、どうして少年として成長しているのか、そしてなぜこんなところにいるというのだろうか？

「その通りよ。八年前に死亡した退治の細胞と快の遺伝子情報を組み合わせてその子は完成した。

だけどこの科学者達はさらなる力を求めた。

翡翠も見たでしょう？ 人体実験をしている馬鹿達」

周りの視線は未だに翡翠達を見ていた。

さっきまで殺されそうになっていた人々。

そして自分の足元に倒れている医療兵達。

「こいつらはあの人達を使ってSHINに取り込んだ力がある。修、ここから先は影の管轄よ。

あなたは翡翠を連れて戦線離脱しなさい。邪魔はさせない！」

陽子は力を解放した。

第三十四話：赤月

お互いのことが好きだと分かったのは、おそらく小学五年生の時。彼氏と彼女。冷静な修でさえ少しはにかむような気持ちを持った。しかし、そんな二人は今から命を賭けて闘うのだ。

「やめてよ！ 修ちゃん！ 陽子ちゃん！！」

翡翠は激突する二人の間に入りたいが、あまりのレベルの高さに止める術を見出だせなかった。

「その通りね。SHINさえ殺せば私達は戦わなくてすむのに」

「TEAMは殺しが禁止だ。」

影でもそれは変わらないだろう？」

冷静な口調が激しい闘いに対比している。

そして、陽子は一旦修と距離をとる。

「やっぱり、修を相手に普通の剣じゃ意味がないわね。」

修、これが最後よ。SHINの危険性は十分理解してるわよね？造られた人間がコントロールされた場合、

特に社長の実の子供であるSHINが敵に回ればいくらなんでも

TEAMに隙が出来る。

だからこそ影がいるのよ。

TEAMを守るためにリスクファクターを消す任務を遂行するために」

悲しい瞳が修に向けられる。

「それはあくまでもこの戦いに負けてSHINを奪われたときの話だ。

お前だってTEAMの一員なら社長達の強さも分かってるはずだ。それでもSHINを消さなければならぬ理由があるのか？」

修は陽子に尋ねる。お前は殺しなどしたくはないのだろうか。

「そうね、私も今回の勝利は信じている。

もちろん社長の強さだって分かっている。

だけど、この戦いの背後に隠された事実があるの。

その鍵となるSHINを消しておかなくちゃ掃除屋界そのものの存亡に関わる！

だから邪魔はさせない！」

「あっ！！」

翡翠の目に映ったのは赤い死神の鎌。

陽子の最も得意とする戦術、遠近距離戦。

「赤月。久しぶりに見たよ」

「そうね。だけどこれでおしまい。死んでもらうわ！」

重量にして一トンはあるだろう赤月を、陽子は軽々と奮つ。

「翡翠！」

「うん！」

翡翠はSHINを抱えて陽子が繰り出した攻撃の直線から離れる。

「厄介なもん出しやがって！」

修の後ろに出来た床がえぐられた痕が、その破壊力を物語っている。

「まだまだ！」

「させるか！ 水壁！」

水の壁が陽子の斬撃距離を縮める。

少しでも翡翠達から陽子を遠ざけるようにしながら、陽子を気絶させる方法を考えていた。出来るなら傷つけたくはない。

「修、影を甘く見ないで頂戴」

「なっ！」

首筋に赤月の刃が突き付けられる。

「快や翔だったら見破ってたでしょうね。」

赤月の持つ能力はなにも物理攻撃だけじゃない。幻覚を見せ、相手の隙を突くことも出来る。

修、これで最後の警告よ。翡翠を連れてここから消えなさい！ 邪魔をするならすぐに首を落とす！」

「出来る訳無いだろう」

入口から一人の少年が入ってくる。

「……遅えよ、快」

陽子は強い覇気に動けなくなるのだった。

第三十四話・赤月（後書き）

すみません！ ようやく再開です！ またよろしく願いします m

（ m

第三十五話：弟

その場にいたものは呆然と立ち尽くす。
こんなところで快が出て来るなどと予測していたのは、修だけだった。

「全員無事か？」

「一応な」

修は苦笑いを浮かべる。

情けないことに、本気の陽子相手に力を制御できるほど修に余裕はなかったのだ。

「陽子、SHINを殺す必要はない。

SHINは間違いなく人間だ」

「だけど！」

快は陽子の頬を打つ。

女の顔を平手打ちにしたのは初めてだった。

「お前が人殺しになってどうするんだよ！

何が起ころうとTEAMは負けたりしない！

確かにお前の言う通り、SHINは人間兵器として扱われた場合にはTEAMの災厄になる。

当然これからSHINを狙う奴も出て来る。

だけどな！ それでも俺の弟なんだよ！

いくら仲間でもSHINに危害を加える奴には容赦しない！！」

快は本気だった。

陽子もこの展開を予測していた。
だからこそ会わせたくなかったのだ。

「快、社長からの任務は細胞バンクの破壊とクローンの消去よね？」
「ああ、表向きはな」

陽子はハツとした。

「俺達の本当の任務は、陽子がSHINを殺さなければならぬ状況に追い込んだ奴らのあぶり出しと始末だ。

だからあえてお前を一旦フリーにした。
まっ、翡翠がここに迷い込んだのは想定外だったが」

呆れた顔をしながら快は翡翠を見た。

「そしてお前と修が闘えば必ず漁夫の利を狙ってくる奴は来る。
だよな、TEAMの裏切り者」

快が見据えた場所から一人の女が現れる。

「香!!」

「あらあら、さすがは社長の息子ね。
いつから気付いていたのかしら？」

白衣を着た女が、陽子の兄達を殺した女がすつと姿を現した。

「最初からだ。とはいっても、あんたの思惑程度なら親父が全て見抜いていたさ。

もちろん、それで犠牲になった陽子の兄さん達には申し訳なかったが」

「えっ？」

陽子は何のことなんだか分からなかった。

三年前、自分達に下った任務は細胞バンクの調査とデータ回収だったはずだ。

香の裏切りも予測していたというのか。

「そう。だったら今頃、社長達は私達のアジトに侵入してる頃かしら。」

だけどさすがの篠原義臣でも殺されるかもね。
相手が相手なんですもの」

香は笑った。

それに答えるように快も笑う。

「ああ、確かにまずいかもな。

だが、出来損ないのクローンなんかには親父は負けたりしないさ。

あんなでも最強といわれてるんだ。

何より、TEAMにいたなら記憶しておけよ？

敵にまわす馬鹿はやるなってな！」

快は力を解放した。

第三十六話：弔い合戦

「陽子！ 翡翠！」

修は二人を抱えると一瞬のうちにその場から消えた。

「あらあら、残ったのは隊長さんだけ？」

「ああ、弔い合戦は隊長が出張れば充分だ」

快は魔法の弾を浮かせる。

召喚系の快にとっては珍しい戦い方だ。

「そう言わないでよ。」

仕方なかったのよ、哲達を殺すことになったのも細胞バンクの秘密を調査しようなんてするから」

「人間兵器を作るなんて禁忌を犯したからだろうが。掃除屋として見過ごすわけにはいかないんだよ！」

覇気が香に叩き付けられる。

ビリビリ来る感覚に香は多少の快感を覚えていた。

「ふふっ、さすがは解析できない細胞の持ち主ね。」

風野博士の研究結果は見事に出てるわけか」

「研究結果？ 何のことだ？」

いきなり実験体扱いされ快は少々不機嫌になった。

「あら？ 優しい社長は何も伝えてないの？」

あなたは確かに篠原義臣の息子だけど、

あなたもSHINと同じように様々な細胞が組み込まれている。
夢乃さんを溺愛してるのも優秀な人間兵器を作る母体だから。
まっ、私達以上に篠原義臣は策略家なんでしょうけどね」

快は静かになった。

さすがにショックを受けたのだと香は思った。

「それは事実なのか？」

「ええ、あなたが一番よく知ってるはずでしょう？」

自分の出来の良さを考えたらね」

「そうか・・・あの親父なら確かにやりそうだな。だが!!」

無数の魔法弾が香に襲い掛かる！

「母さんを実験台に使ったんだったら、例えどんな理由があろうと
あの親父を消す！」

向けられる矛先が明らかに違うのではないかと、
冷静な者がいたらつつこんでいたはずだ。
しかし、今の快に何を言っても無駄だろう。

「なるほど、やっぱり考えて戦ってるわね。これじゃあ、あなたに
近づけない」

魔法弾をよけながら香は心の中で舌打ちした。

香は近距離戦タイプだ。

一発快に当てる事が出来れば、間違いなく快に致命傷を負わせる
事が出来る。

「だけど、それ以上の策はないのかしら？」

「ある」

それは一瞬だった。香の後ろに快はいたのである。

「雷光」

「いやあああ!!」

香は感電した。そして途切れていく意識の中、最後の力を振り絞って快に言う。

「ふふ、さすがね……」

「……どうして避けなかった？ 元・影にいたあんたが今のを避けられないわけではないと思ったが」

「ええ、あの程度ならね。だけど、私も見捨てられたのかしら……」

香は意識を失った。そしてその言葉の意味はすぐに分かる。

「ご苦労だった、私のクローン。

作り出した甲斐があったみたいだ」

「なっ!!」

現れた人物に快は絶望した。

第三十六話：弔い合戦（後書き）

本当に更新遅くなってすみませんでした！
また頑張って書いていきます

第三十七話：風野博士

信じたくないことはこの世には沢山転がっている。

快の目の前に現れたものも否定できるならすぐに否定したい。

まさか自分の父親達がずっと助けたがっていた翡翠の父親が香を殺したのだから……

「久しぶりだね、快君。

私がTEAMを離れてから十数年にのぼるから君に記憶など」

「あります。物心は三歳の時には付いてますから」

快はサラッと答えた。それは動揺を隠すため。

「そうか、私が思ってた以上に優秀だったか。やはり義臣の遺伝子はかなりのレア物というわけか」

風野博士は笑った。それは科学者としての喜びに満ち溢れていた。

「さて、快君。君に頼みたいことがあるんだが聞いてもらえるかな？」

「聞くだけなら」

嫌な予感がする。義臣が話していた風野博士とのイメージがかなり掛け離れている。

聞いていた話は人のための研究をする科学者。それが風野博士だと聞かされていた。

「なに、簡単なことだよ。君に私の研究材料になってもらいたい。

もちろん寂しければTEAMの高校生バスターの面々も一緒にね」
「断る！ 一体あんたは何者なんだ！？」

親父はあんたが人を救うために研究を重ねてきたと言っていた。
だから今回あんたの情報を掴んで助けに向かったんだ。

その結果がどうしようもない男だったなんてふざけてるんじゃない
えよ！」

快が風野博士に突撃していこうとしたが、それを止める者達が現れた。

「快、お前達高校生バスターはここまでだ。今回は引け」

そこに現れたのは影を率いた瀬野龍一だった。

「まだ任務は終わってない。俺達の任務は細胞バンクの壊滅と要人の始末。

それに今風野博士が含まれた。この男が今回の首謀者なんだろう

！？」

「そうだ。だからお前達は引くんだ。

風野博士に一对一で勝てる相手などこの世にはいないからな。だから義臣が来るまで俺達が食い止める」

足手まといという現実が目の前にある。

戦場を離れてなお自分より強い龍一がそう言うならば命令には従うべきだ。

だが、快は逆らった。

「親父が来るまでどれだけかかるんだよ」

「さあな。だが、5分は稼ぐ自信はあるな」

「だったら行けない。心配しなくても足手まといにはならない。

ただ、5分後のことは全て親父にかける。それなら問題ないか？」

快は一気に力を上げる。間違いなく自分の力のリミッターをはずすつもりだ。

「・・・それなら5分30秒はもつが、期末は諦めるか？」

龍一はニツと笑った。

「ああ、一日で全てやるから心配しなくていいよ。
龍二と違ってすでに範囲全てを学習済みだ」

そして空気は変わる。

激突寸前のたわいのない会話だった。

第三十七話：風野博士（後書き）

放置プレイしてすみませんでしたっ！！

連載再開です

第三十八話：時間を砕く拳

リミッターをはずすこと。

バスターにとつては一番戦いたくない相手であり、自身にとつては確実にしつぺ返しをくう特攻そのもの。

だが、やらなければならないときがある。

誰かを守るためという名目以前に、自分が動いてしまつから不思議だ。

「さて、俺も実践は久しぶりだからな」

龍一は屈伸運動をし始める。

間違いなく彼自身も全力を出し切るつもりだ。

「おじさん、俺達は親父に反発してばかりだけどさ、多分龍二が一番素直だと思う」

「そうか。まあ、俺達は息子をほつたらかしにしてばかりだからな。だが、快君達のおかげだろうな、あいつはちゃんとまっすぐに育ってくれた。ありがたいことだ」

龍一は笑みを零した。本当に心からそう思ったからだ。

「だったら俺も礼をいっておきます。

あいつを家に置いてくれて嬉しかった」

「そうかい」

それが最後だった。

その場にいた者達は一斉に風野博士に殴り掛かった！

「まずは四人」

覇気が快と龍一以外の四人に襲い掛かり戦闘不能となる。その時間僅か三秒。

「ふざけた力だ」

「君ほどではないよ、瀬野龍一」

たった一秒で龍一の後ろに風野博士はついていた。

「くっつー!!」

強烈な蹴りが龍一を襲うが、やはり元・影の総隊長の実力は半端ではなかった。

しっかりと足を掴んでいたのだ。

「快!!」

「いけっ！ 神龍!!」

神々しい龍神は風野博士に襲い掛かるが、それを片手で止める男がいたのだ。

「危ないな。神龍は義臣じゃないと使いこなせないものだ。

さすがに暴走したら私も疲れてしまうからね。消えてもらっつよ」

そして弾ける……

「ばかな!!」

「油断するなよ、義臣の遺伝子は継いでるんだろっつ?」

まさに一瞬の影分身。その分身の強烈な蹴りを快は背中に受ける。

「ガハッ！！」

「快！」

龍一は駆け寄ろうとしたが風野博士はそれをさせない。

「近付かせたりはしないよ。時空系の力を壊す力の持ち主なんて普通はあつてはならない存在だからね」

「ほざくな！ お前の方がよっぽどあつてはならない科学者だろう！俺達を散々弄びやがって！」

龍一は快の前に立ち塞がる風野博士に再度躍りかかる。

「砕ける！」

「させない」

それは時間の狭間での戦い。

相手の時間を壊す龍一の乱打が風野博士に襲い掛かるが、

「……やはり弱くなったようだ。

あの時、美咲が殺された時の君に戻ってさえくれれば少しは私も戦えただろうに」

「……！！ お前がどうしてそれを知っている！！」

拳が止められ、風野博士は答えた。

「私が殺したからだ。それ以外思い付くかい？」

そして貫かれる胸。しかし、その痛みを龍一は感じなかった。

激怒と共に龍一はその場に膝をおりすべてを解放する。

「ようやくすべてが繋がったよ。」

風野博士、あんたをこの世から消し去る」

そして話は激動と言われた過去に戻る。

それはまだ快達が生まれて間もない頃、細胞バンクがまだ設立された頃の話へ・・・

第三十九話：霧澤美咲

霧澤美咲、かつてTEAMに所属していた義臣達の幼なじみ。
その彼女は確かに存在していて、死んでいった……

「美咲ちゃん、美咲ちゃん」

「……夢乃」

眠り眼を擦りながら美咲は意識を現実に向けていく。

「おはよう、珍しいね、美咲ちゃんがお昼寝してるなんて」

夢乃はふんわり笑う。風通しのよい篠原邸の裏庭は絶好の昼寝スポットだ。

「たまにはね。それより、また快君大きくなったんじゃない？
ついこの前までヨチヨチ歩きしてたのに」

「そうなのよ、どうも発育が早いみたいね。この前も風野博士に検査してもらったんだけど、普通の子よりIQレベルも高いみたい。
細胞操作の実験を私達夫婦でやりたいと言われたときには驚いたけど、

こんなに健やかに育ってくれたならいうこと無いな」

「確かにね、どこの子も皆元気ならなにより」

美咲は少しだけ悲しそうな表情を浮かべた。彼女にも一人女の子がいる。

しかし、その子は今、美咲の傍から離されているのだ。その話はおいおい語られることになる。

「美咲ちゃん、大丈夫。すぐに会えるよ」

夢乃が言うならそうなんだろうと美咲はそう思える。彼女は綺麗に笑った。

「美咲」

「龍」

美咲は当時影の総隊長の任についていた瀬野龍一が現れたと同時に、凜とした表情を浮かべた。

「義臣からの召集命令だ。すぐに出るぞ」

「分かった」

美咲は瞬時にその場所から消える。

その直後風野博士は現れた。

「夢乃君」

「風野博士、あの二人が呼び出されるなんてただ事ではないようですね」

美咲はTEAMの中でもかなりの使い手だ。彼女と龍一が組まなければならぬほどの任務となれば危険を伴うもの。

「ああ、二人には申し訳ないが、私の細胞バンクに接触してくる不届きものを懲らしめてもらうことになった。

組織の名は『ブラッド』、氷堂が作り上げた無法者集団だ」

それを聞いて夢乃は飛び出そうとしたが、風野博士はそれを止め

た。

「医療兵が今回の前線に出てはならない。

色鳥透士が不在の中で君が負傷してもらっては困る」

「だけど!!」

「私がここに来たのは彼等と戦うため。大丈夫、科学の面においてはTEAM一番ではあるからね」

それだけ言い残して風野博士は消えていった。

そして社長室に、TEAMの三小隊が集められていた。

「およそのことは聞いてるな。

ブラッドに風野博士が掃除屋界のために作り上げた研究品の数々のデータが流出する事態が起こった。

悪用される危険性が高いものもある。そうなる前に奴らを始末しろ」

いつも以上に張り詰めた空気。事態は最悪の時間へと突き進み始めた……

第四十話：闇が現れた日

掃除屋ブラッド。氷堂尊氏が組織するバスター集団。

その悪名は掃除屋界の中でもリスクファクターとして轟いていた。

「デビル・アイ、それが今回の一番危険な代物か」

ブラッド本社を目指し龍一、美咲、風野博士の三人は走る。

基本は四人小隊だが、後一人は現場で合流する手筈になっていた。簡単に言えば、ブラッドのスパイとして入り込んでいる男がいるのでその人物と合流しろとのことだ。

「ああ、氷堂は数年前に義臣に片目を斬られて視力を失ってる。

だが、風野博士がクローン技術を用いて義眼を作り上げたんだ。それが利用されようとしてる」

「利用ならまだいい。私の義眼がデビル・アイなどといい名前に出来る技術者達がブラッド内にはいる。

そっちの方がこの先もつとも危険な事態だ」
「確かにな」

科学の危険さを理解しているからこそ、今回は慎重に事を運ばなければならなかった。

だからこそTEAMの精鋭達が選ばれたのである。

「やはりそいつらも始末しておくべきか」

「いや、優秀な科学者ならば生かしておくべきだ。

ブラッドについているからといって完全に敵だと思いつ込むのは危険過ぎる。

あの氷堂尊氏なら科学者の一人や二人、脅すことなどなともな

いだろう」

正論だった。相手はバスターではなく科学者だ。氷堂尊氏が利用しようとしているだけの可能性は捨てきれないのである。

「だったらどうする？ 彼等は殺意を見せれば殺して投降するなら保護しろというのか？」

美咲は龍一に尋ねた。最終判断は隊長が決めることだ。

「……幼い子供だけは殺さず捕獲。他の者は抹殺対象としてかれ。例え投降して来ても全ての自由を奪え。何があっても隙を見せるな」

龍一の命に緊張が走る。全ては自分達とTEAMを守るため。甘さは命取りになる。

「了解」

「では、一旦ここで別れる。俺は氷堂の抹殺にあたる。

美咲と風野博士は科学者達と応戦してくれ。絶対に死ぬな！」
「ああ」

それ美咲と龍一が交わした最後の言葉だった。

龍一と分かれたあと、裏切り者が牙を向いたのである。

「……霧澤美咲か、TEAMの影は優秀な人材が集まると聞いたが、噂以上のサンプルだ」

「博士！！下がってください！！」

美咲は風野博士を後ろに下げ、声がした方に躍りかかった！

「ちっ！」

声の持ち主は美咲の攻撃を交わしさらに闇へと入り込んでいく。

「博士！ 奴を追います！」

「ダメだ！ 深追いするな！」

しかし美咲はその忠告を聞かずに追い掛ける。

「美咲！ 止まれ！」

「止まるわけにはいきません！ 今ここで手掛かりをなくすわけには！！！」

「伏せろ！！！」

美咲は風野博士に庇われ地面に伏せた。

「ちっ！ 溶解術か！」

「その通りだ」

闇から現れた男は不気味な笑みを浮かべた。その顔は知っているもの。

「えっ！」

次の瞬間、美咲の血が滴り落ちる。
胸に刺さった違和感は間違いなく刃物。

「だから追うなと言っただ。霧澤美咲」

風野博士が正体をさらけ出した瞬間だった。

第四十一話：リミッター解除

「相原哲、僕は相原哲です」

「聞いている。相原陽平の息子だな」

龍一はすまなかったと刃を下ろした。

まだ中学生ぐらいの陽子の兄、相原哲と龍一は遭遇していた。

この任務でもし保護できるなら保護しろと言われていた少年だ。

「どうする、お前もTEAMに来るか？」

「是非お願いします」

哲は子供らしい笑みを浮かべた。

「それより龍一さん、片岡航生さんをご存知ですか？」

「ああ、合流する予定だがあいつがどうした？」

片岡航生は翔の父親だ。今回の任務で合流する予定の男である。
哲はすつと一枚のディスクを龍一に渡した。

「これを篠原義臣さんに渡してください。片岡航生さんが掴んだ細胞バンクの実態とブラッドの関係です。」

おそらく風野博士も関与しているとおっしゃっていました」

「そんなバカな…博士はTEAMを売るような人じゃない」

「ですが、風野博士の研究仲間であったライ・タナーがいます。可能性はゼロとは限りません」

哲の言うとおりだった。細胞バンクは風野博士が立ち上げた組織だ。

義臣の信頼を得てTEAMをかくれみのにし、暗躍するにはもってこいだ。

特に敵対する組織と風野博士が繋がっていることなど疑うはずもない。

「片岡航生さんは前から博士を疑っていたしやいました。

おそらく義臣さんの子供を研究対象にしたのも彼の好奇心だけではないのではと」

言われればかなりの不可解なことがある。だが、風野博士がTEAMに施してくれたのはプラスにしかっていない。

「とりあえず、美咲と合流する。

俺は仲間を信じたいが、もし風野博士が裏切るような真似をすれば……」

影の総隊長としてはTEAMに害をなすものは抹殺しなければならぬ。

特に今回はブラッドが、氷堂尊氏が絡んでいるのだから……

「哲、お前は兄弟が二人いただろう、二人を連れて早く戦線を離脱しろ」

そして龍一は素早く印を結び哲の腕に刻み込んだ。

「この術式をお前の腕に刻んでおく。

お前がTEAMに行きたいと念じれば飛ばしてくれる。

出来るだけ早く離れるんだぞ」

「はい」

そして二人は離れた。

霧澤美咲は巨大ビーカーの水の中で目を醒ました。コポコポと水の音が暗室に広がっていた。

胸の傷が少し塞がっているということは誰かが治療してくれたという事。

そして彼女の目に自分を刺した張本人がいた。

「は…かせ…？」

朦朧とする意識の中、彼女は言葉を紡いだ。さっきの出来事は敵の幻術だったのかと思っただが、それを検討違いと思わせる言葉が降り注がれる。

「残念ながら君の命運はここまでだ。

霧澤美咲君、君は私の制止も聞かずにこの研究室にたどり着いてしまったんだからね」

美咲の周りにはクローン人間や生物の屍が無数あった。

間違いなく禁忌の実験が行われていたに違いない。

美咲は自分が明らかに研究材料にされていると自覚するのに時間がかからなかった。影としての彼女の目を風野博士に向ける。

「…違うでしょ、誘い込んだんだ」

美咲は全てが風野博士の思惑だったと知る。TEAMにいたのはこのため…

「だけど…！ 私一人で事足りるなら早い…！」

美咲はリミッターをはずし周囲の研究材料を消し去っていく。

「風野博士、いや、風野秀生！！ TEAMを裏切った罪、その命をもって許そう」

美咲は風野博士に躍りかかった！

第四十二話：風野星華

リミッターをはずしたバスターが戦える時間は知れている。
特に美咲の場合、物体そのものを消滅させる力を放っているのだから…

「すばらしい…さすがはTEAMのサンプルだ」
「ほざくな！」

美咲は風野博士に特攻をかけた！

「召喚…破壊神！」

破滅を望む神は風野博士に襲い掛かるが、風野博士はその攻撃すら余裕でかわしていた。

「さすがは影。召喚レベルがトップクラスだが…」

風野博士は右手を破壊神にかざすと、破壊神は一瞬にして弾けた。

「この程度は義臣の足元にも及ばないな」

「当たり前だ」

「なっ！！」

刃が後から振り下ろされ風野博士の頬を掠めた。

「幻術だからな」

美咲はニヤリと笑った。

それにつられるかのように風野博士も笑った。

「なるほど、リミッター解除で幻術を使うとはたいした戦略だ。ただ突っ込んでくる馬鹿とは違うようだ」

「お前は義臣に匹敵する頭脳の持ち主だからな。リミッターをはずしだけで敵わないことぐらいわかってる。

だが、このまま私も戦うことは出来ない」

口から血が流れてくる。早くも体が悲鳴を上げ始めた。

「私の専門分野は禁術に値する。

だからこそ、今この力を解き放とう」

美咲はそれだけ言い残すと、自分を光へと変えた。

「まさか!!」

「そのまさかだ。お前を封じ込める。

もちろん悠久の時とはいかないが、少なくとも次のバスター達が育つ時間は与えてくれる。

お前を殺す役目はあの子達にたくす！」

「やめろお!!!!」

断末魔の叫びと未来へ託された思いだけがその場に残っていた。

その頃、TEAM本社に一人の女が義臣と対面していた。

「久しぶりね、義臣君」

「痩せましたね、先輩」

にっこり義臣は笑った。

義臣に会いに来たのは翡翠の母親、風野星華だった。

「翡翠には会っていかないんですか？」

「ええ、さすがに起こせないわ。」

それにね、私がここに来たのは秀生の研究の危険性を知らせに来たの」

義臣は眉をピクリとあげた。

「秀生はたしかにあなたたちを救う手助けをして来たけど、細胞バンクの設立以来、かなりの組織が出入りしている。」

それが例えTEAMの敵である組織でもその科学を売っているわ」
「確かに敵を救っていることは黙認している。」

だが、博士は医学でも無理だと言われている事を可能にして人の命を救っているだけだ。

いくら敵であろうと命の重みはある。だから今回のブラッドの件は影を動かしたんだ」

義臣はいくら敵でも救える命は救いたいと思っていた。

抹殺指令を出すことは多々あるものの、一般のバスターまで殺すつもりはないのである。

「…義臣君、だけどクローン人間の研究は何のためにやってるのか説明がつかない。」

私も科学者として言わせてもらおうわ。

秀生を信用しないで。いくら快君の細胞操作を施して優秀なバスターを作り上げてもそんな命を弄んどると思えない。

何より、作られた人間だって快君が知ったらどうするの？」

星華は悲しい目を義臣に向けた。
だが、それ以上に義臣は苦しそくに答えたのだ。

「先輩、風野博士が救ってくれたのは快だけじゃないんだ」

「救ったって…それは」

「違う。風野博士はTEAMを裏切るような人じゃないんだ。
先輩だってそうじゃなければ翡翠を産まなかっただろう？」

確かに義臣の言う通りだ。

誰もが風野博士を信頼していた。それだけの事を風野博士はしてくれたのだ。

「先輩、細胞バンクの本来の目的は俺の解析できない細胞を調べるために風野博士が設立したんだ。」

普通の人間の細胞が解析出来ないなんてことがあると思うか？」

それが物語っていることは一つだけ…

「博士が救おうとしてくれてるのは俺自身だ。俺は人間の可能性が低いんだよ」

衝撃の告白だった…

第四十三話：真実

夢乃は呆然と立っていた。

義臣が人間じゃない、それが事実かどうか現代医学でも科学でも証明できない。

だけど人間としての性質は備わっている。義臣はそんな存在だった。

「義臣君：確かにあなたの本当の両親は不明だけど…」

「ああ、俺は物心ついた頃から『ギャンブラー』に預けられていたからな。」

確かに人間としての成長は遂げて来たが人間として不可解な事が多すぎる。俺を構成する細胞と血液は世の中に存在しないんだ」

星華は息を呑んだ。世の中に存在しない存在がここにいる。

「もちろん人として生きるのに事欠きはしないが、快に遺伝してしまいう可能性が高かったんだ。」

その結果、何とか血液だけは夢乃の遺伝を受け継がせることに成功したが、その他全ては俺だった」

出来れば継がせたくないものだった。

しかし、どうしても快に受け継がれてしまったのである。

「自分が人間じゃないかもしれないと快が思ったとき、そんな訳無いだろうと笑い飛ばしてやりたいんだ。」

だから風野博士は細胞バンクを立ち上げてくれた。信じるなんて方が無理だろ…」

「義臣君…」

星華はそれ以上何も言えなかった。

義臣の苦しみはもちろん、扉の外で必死に泣くのを堪えている夢乃の気配を感じていたから…

「社長！ 大変です！」

氷堂仁が屋根裏から下りて来た。

その体には無数の切り傷を付けていた。

「仁！ どうしたんだ！？ 早く治療を」

「止めてください！ 総隊長が暴走しています！」

「龍一が！？ なぜ」

「霧澤部隊長が戦死！ 風野博士が行方不明になりその犯人を殺すために味方にまで危害が！！」

それを聞いて義臣は瞬身で消えた。

龍一が暴走したとなれば時空間そのものが破壊されているはず。

最悪の場合龍一まで失ってしまうからだ。

「何処だ！ 美咲を殺したのはどいつだあ！！」

「総隊長！！ 怒りをおさめてください！！ このままでは味方まで…！！」

言い終わる前に完全に威圧されてしまう。味方の声など届いてなかった。

「お前達、下がってろ」

「社長！！」

義臣は龍一の前に立った。

「…龍一、時空崩壊の力を解け。これは命令だ」

「義臣…美咲は誰に殺されたんだ？ あいつを光にしたのは誰なんだよ……」

「守龍……」

龍一の怒りを義臣は龍神を使って守る。

時空間は完全に歪んでいた。

「あいつは俺達を守るために命を散らした！ それを無駄にするな！」

「ふざけるな…… あいつが自分を犠牲にしなければならない敵つてなんだよ…… 風野博士じゃねえのか……」

「違う…… 博士じゃない……」

「じゃあ誰だあ……」

時空間に更なる亀裂が生じる。もはや感覚すら鈍り始める。

「…あいつが封印したのは風野博士のダミーだ」

「そんな馬鹿なことがあるものかあ……」

「きけえ……」

龍一を怯ませる強烈な覇気が空間を支配した。

「…美咲はメッセージを残してたんだ。俺が造られた人間だという可能性は知っているな」

「…それがなんだよ」

「同じなんだよ…俺と同じ細胞だったんだ……」

義臣の片方の目から一筋の涙が流れていた。

風野博士は人間だと証明されている。それは翡翠が生まれていることで疑いようのない事実だった。

「じゃあ…美咲は」

「俺と同等か、それ以上の力を持つ風野博士のダミーと戦って死んだんだ」

「じゃあ風野博士は…」

「美咲が残してくれた記憶を覗いた。風野博士は何人も造られ、本物は捕らえられていた!!」

龍一は一気に力を落とした。

人の記憶を完全にたどる能力を持つ義臣の力を疑えるはずがない。それが光となった人間のものでもだ。

さらに美咲のことだ、死ぬ前に確実な情報を残しているはずだ。

「一体黒幕は誰なんだよ…」

「…探すしかないんだ。何年かかってモ」

そして時は現代へ…

「やはり霧澤美咲と同じだ。君は弱い」

風野博士は気絶した龍一に吐き捨てるのだった。

第四十四話：未来に託す思い

「うちのバカ息子は？」

TEAM総料理長、橘太陽は夢乃に尋ねた。

「大地ちゃんの命は何とか取り留めたわ。
ただ、しばらく厨房に立つことは禁止ね。まあ、立てる状況でもないけど……」

オペを終えた夢乃は一息付いていた。
何人も怪我人はいたが、今回の任務に白真の実家である色鳥病院のスタッフを応援に呼んでいたのだった。

「ふん、死のルーレットなど使うとはまだまだ修業不足だ」

「仕方ないわよ、相手が相手なもの。それに相手を殺さなかっただけ立派だったわ」

「ふん…あの気まぐれな死神が」

太陽は舌打ちした。『死のルーレット』は太陽が編み出した術である。

全てを運に委ねるとはいいいながらも、気まぐれな死神の意志と術の使い手の意志も多少は働きもするわけだ。
とはいえども、未熟な使い手では当然高いリスクを背負うのである。

「それで、SHINはどうするんだ？」

「私の子だからもちろん守る。けど……」

夢乃は椅子に腰かけた。太陽は一つ溜息をつく。彼女の言おうと
してることは手にとるように分かる。

「SHINの体は確かに造られたものだ。お前と義臣の遺伝を継いでな。」

だが、俺達の子供はすでにSHINを弟にしたがってる。今はそれでいいだろう？」

「うん…そうだね」

夢乃は静かに答えた。

その同時刻、快は一人の人物と再会していた。

「…おばさん」

「久しぶりね、快君」

快の目の前に現れたのは死んだはずの翡翠の母親、風野星華だった。ただし、グラフィックの…

「なんで…」

「驚いたでしょう？ 私は死んでいるのだから」

快は気付いた。これは死ぬ間に星華が残した遺志の残骸。おそらく、彼女の最期のメッセージだ。

「よく聞いてね、快君。この細胞バンクは風野秀生が設立した篠原義臣を救うための組織よ。」

だけど、秀生の頭脳を付け狙う組織がちらつき始めた。一つが『ブラッド』、そしてもう一つが『ドラッグ』。片岡航生が潜入して

いる掃除屋」

快は黙って聞いていた。もうすぐ全てが見えてくるからだ。

「きっとあなたのお父さんは秀生を何とかして取り戻そうとしている。

それであなたに多くの不可解な行動をとっているようにも思わせるでしょう。だけど理由は必ずある……」

そうだろうと快は思う。だが、いつもよりどうしても納得いきな
いことばかりが多ければ疑ってしまう。

「おばさん、どうして父さんはそこまでおじさんを取り戻したい
んだ？

細胞の解析が不可能でも、SHINのように造られたって人間だ
ろう？」

それを聞いて星華は微笑んだ。一番聞きたかった答えだから……

「そうね、快君。だけどね、あなたのお父さんは科学者の風野秀生
でも一般人でも助けたと思うわ」

「どうして……」

星華はキリッとした表情で言い切った。

「篠原義臣はバスターだもの。それ以外の理由なんて必要ないわ」

すつきりした。ただその気持ちが快を包む。掃除屋なら任務を遂
行するのが絶対条件。助けると決めたら何がなんでも助けるのだ。

「おばさん、翡翠に何を伝えたらいい？」

星華のグラフィックが消えていく。それは遺志が消えていくこと…

「親が望むことは一つよ。『幸せになりなさい』…」

星華は完全に消えた。そして快は天井を睨む。感じるのは気配…

「出てこいよ、ドラッグ!!」

快が放った一撃の魔法は天井に穴を開けた。そして現れた男が一人…

「…ようやく辿り着いたようだな。快」

「おじさん!？」

なんと！ 現れたのは片岡航生だったのである！

第四十五話：片岡航生

「よう、戻って来てたのか」

「久しぶりだな、義臣」

航生は不適な笑顔で答えた。

翔とは似ても似つかないワイルドな父親である。

「で、ここにいたドラッグの幹部連中は？」

「影に渡した。だが、風野博士の行方はわからないみたいだな」

「そうか、はずれか…」

義臣は溜息をついた。航生ほどのバスターがつかめない風野博士の行方だ。

おそらくドラッグの幹部を捕まえたところで分からないだろう。

「じゃあそろそろ快を気絶させといてくれないか？　ここからの情報には危険なんだね」

「なっ！！」

まさに一撃。義臣は首筋を打って気絶させた。

「で、何を掴んだんだ？」

「ほらよ」

一枚のディスクを航生は投げ渡した。

「ドラッグとブラッドの金の流れだ。」

この細胞バンクも絡んではいたが、どうやらここは俺達を呼び込

むためのダミーだったようだな。

数年前お前に渡したものは破棄してくれてもいい。あれは俺を騙した馬鹿が作り上げてたもんだ」

「へえ、数学者の癖に騙されたんだ」

「まっ、そいつを消したおかげで手に入れたものだ、信用して構わない。」

確かな証拠として副社長が戻ってくるはずだぜ？」

義臣は汗タラタラになった。彼が絶対に苦手とするお目付け役が戻ってくるとなれば気が気でない。

「その時、美咲の娘も一緒に帰ってくるはずだ。

言つとくがその娘は間違いなく命を狙われるぞ。副社長と父親が守っていたから今まで難を逃れていたが……」

「……大丈夫だ。快達は強くなって来ている。それに必ず掃除屋界の闇は近いうちに現れる」

「お前を造り上げた組織か……お前の本当の両親はそこにいるんだろ
うな……」

それだけ言い残して航生は消えていった。

「……さて、俺も帰って寝るか」

「その前に治療が先でしょ、社長」

現れたのは氷堂仁のチームだった。優奈と秘書の智子、そして夢乃が指導している治療兵の中村が現れた。

「社長、早く傷を見せてください。あれだけの数のクローンを相手にして傷一つも負ってないわけがないんですから」

中村は義臣を座らせ治療を開始した。外傷はほぼなくとも、内部はかなりの酷使していた性がガタガタである。

「快は大丈夫なんですか？」

「うん、気絶してるだけだ。ただ、しばらくは動けないだろう。リミッター解除してるみたいだからね」

応急処置が早かった性が、命を失う状況ではなかった。

「とりあえず、本社に戻ろう。多分今回の件は全員に説明しないと怒られるだろうしな…」

それだけ言い残して義臣は眠りについた。

「社長、この数日間寝てなかったのよね」

「…お疲れ様でした」

こうして、細胞バンクの戦いは一時期終結したのである…

第四十六話：任務完了

任務終了明けの昼、快は自室のベッドで夢乃と話していた。いつもより満面の笑顔を浮かべている母親と…

「期末試験には間に合わないわね、快ちゃん」

「…母さん、すごく楽しそうだな」

「そう？ 父さんじゃないんだから喜んではいないわよ？」

とは言いながらも、息子との時間を楽しんでいるのは確か。紅茶まで持ち込んでいるのだから…

「それで、SHINは？」

「SHINちゃん？ 陽子ちゃんと遊んでるわよ」

「母さん！！」

いきなりの爆弾発言に快はベッドから飛び出そうとしたが、夢乃の魔力がそれをさせなかった。

「大丈夫。SHINちゃんの記憶は科学班が消したわ。だから陽子ちゃんに殺されそうになった記憶はないの。」

さらに陽子ちゃんには悪かったけど、SHINちゃんを殺そうとした記憶はないわ。

もちろんその場にいた修ちゃんと翡翠ちゃんの記憶もね」

「それって…」

快は何とも言葉では言えない感情に支配されたが、夢乃は紅茶を一口飲んで答えた。

「いいのよ、まだSHINちゃんは七歳なんだもの。これから篤星小学校に通って大きくなったらいいの。」

快、SHINは小さい頃は病弱だったから幼稚園に行っていないと記憶操作したわ。

けっして造られたって言わないこと。それにね、母さんは快が立派なお兄ちゃんになってくれると思ってるわ」

「…あいつが俺を兄だって思ってくれるなら俺も弟だって守るさ」

八年前、自分の性で流産した夢乃に対しての謝罪の気持ちは強いが、弟が出来たことに少しだけくすぐったい気持ちにもなる。

「けどどうする？ 快ちゃんも悪いところだけ記憶を消してあげてもいいけど」

「夢乃さん、そりゃ甘やかしすぎだろ」

楽しそうに部屋に入って来るのは自分が期末を受けられないぐらい気絶させた父親である。

「よう！ 相変わらず機嫌悪そうだな」

「あんたの性だろ、今日の期末受けられなくなったのは」

「お前どのみち動けないだろ」

確かに義臣の言うとおりだが、ペンぐらい動かす力はある。

「あれぐらい一日でやれ。それに大原ちゃんから全教科の問題は預かってるから」

さすがは担任である。全て予測済みだ。

快は問題を受け取るなり、さらさらとペンを動かした。

「それで、話してくれるんだろ？ 今回の件に俺達を動員した本当の理由」

テスト片手に話は出来る。快はそれだけ優秀である。

「ああ、まず紫織達に細胞を盗ませたり、修に情報収集させたりと高校生バスターをやけに使ってたことから気になってるだろ」

「ああ。今回の件は親父にしてはありえない人選が多かった気がするな」

皮肉が半分だが、義臣はさらりと答えた。

「あれは困だ。TEAMの高校生バスターの力が強いと思わせとけば、さらにその逆に取りられたとしても奴らをおびき寄せるきっかけになった」

十分な返答である。TEAMの細胞というだけで科学者達が涎を垂らして追っかけて来たのだ。

おびき寄せるには持ってこいの困達である。だが、納得いかないこともある。

「じゃあ、咲とライ・タナーを闘わせた理由は？」

ライ・タナーの力は咲の倍だった。そんな相手と咲を闘わせたのである。

「…咲から言い出したことだ。相手が自分以上の力量だったらすぐに航生を呼び戻せとな」

分かってると思うが、咲は影の部隊長だ。お前達は酷だと思うかもしれないが、命をかけてもらうしかない」

「…ああ」

快はそう答えることしか出来なかった。

影とはそんな部隊だ。

「あと、陽子の監視は細胞バンクのスパイ、さらにあいつがSHINを破壊する事が目的でこっちに帰って来たと情報が入ったからな。

まあ、そのあたりはお前も気付いていたはずだろうがまさか本当にSHINを守ってくれるとは…」

「俺と同じ細胞を持つクローンの破壊、それでピンと来たよ。

親父が細胞関連のヘマを仕出かすとしたら八年前しかない。それに細胞バンクなら人間を作り出す可能性もあるし、普通ならそれを守れというはずだ。

まあ、修が掴んだ情報があったから確信したんだが」

任務前、修が見せてくれた細胞バンクのデータ中にSHINが人間である可能性が高いと確信した。

陽子の性格から細胞バンクの最高傑作であるSHINが危険因子である以上、自分の失態だと思い破壊する可能性を考慮していたのである。

「仲間に弟を殺させるわけにはいかないだろ」

「上出来だな。とりあえず、今回の件はぎりぎり合格だろう」

「あら、それは厳し過ぎない？」

「夢乃さん、快は隊長の任務は果たしたが先発隊は大地が重傷、さらに修と陽子が闘う羽目になり、おまけに翡翠も魔力を使い果たしてるんだ。まだまだあまい！」

結局は予測通りの点数を父親に出される。しかし、今回は夢乃が

快の味方だった。

「あら、そういうならあなたも今回は落第点ね」

してやつたりと快は微笑を浮かべたが、やはり義臣は鮮やかに、
尚且つ快を激怒させる方法など心得ているのだ。

「ああ、だから夢乃さん、今夜は慰めてくれよ」

夫婦のうつとうしいぐらい甘い空気に息子はブチ切れた！

「おい…クソオヤジ、さっさと仕事してこい！！」

任務完了…。

第四十七話：期末試験結果発表

期末試験終了から三日。高校生バスター達の怪我は完治していた。そして彼等は夏休みを楽しく迎えるための決戦の地にいる。

「やっぱり快が一番か」

「すごいねえ」

第星名物、テスト結果上位者張り出しベスト50。
相変わらず一位には篠原快、時枝修と書かれているわけである。
そして高校生バスターの面々はそれぞれの結果を確認しに来るのである。たいてい上位50位に入ってる者達だからだ。

「快ちゃん！ 愛の抱擁してあげる〜！」

「くつつくな！ うつつうしい！！」

白真のお決まり行事も快が一番をとったときの抱擁である。
それを首根っこを引っ張って止めるのが紫織だ。

「やめなさい！ 白、今回は何を間違えたの？」

「うゝん、一点が気になるよなあ」

快達と一点差で色鳥白真の名前が続く。

「どうせ力尽きて一問見逃したんだろ」

「確かに。化学の時間にすぐ力尽きていたし」

白真が一位にならない理由は力尽きてぐったりするからである。

「それにしてもうちのクラスは上位に入る奴が多いよな。
快到修、白真は絶対ベスト3だし、紫織も8位だし」
「咲ちゃんも11位だよ！　いつ勉強したんだろ？」

全くの謎である。咲は期末試験の勉強をしていた記憶などない。
間違いなくじぶんの今までの知識を総動員した結果だ。

「…それに比べて大地と翔、龍二は赤点組か…」

「翔ちゃん数学は百点なのに…」

「仕方ないだろ。他の教科はさっぱりわからん！」

間違いなく数学と体育の時間以外はほぼサボってる結果である。
そして結果さえ分かれば当然夏休みの予定に話は変わる。

「紫織、夏休みは温泉に行こう！　混浴」

「嫌よ！　足湯になら付き合っただけであげるわ」

さすがは白真の彼女だけあり流し方は完璧である。

「陽子、夏休みになったら墓参りに行こうな」

「うん」

修と陽子にいたってはいかにも恋人らしい空気が漂う。

お互いが闘った記憶も、陽子がSHINを殺そうとした記憶もないのだから…

「俺達は補習かよ…」

「頑張れよ、俺は古典だけだからな」

「私も勉強には付き合ってたげるよ」

大地、翔、優奈の予定は決定である。

ちなみに優奈もテストは20位と優秀である。

「快、ちよつと来て」

「ああ」

浮かない顔をした少女が一人、翡翠だ。
その様子を見ていた友人達が騒ぎ出す。

「どうしたんだ翡翠……」

「ついに告るか？」

友人達の言葉はもちろん違つと誰もが思っていた。
それだけ翡翠の空気が普段と違つていたからだ。

第四十八話：騒がしい夏は始まる

翡翠が強引に快の手を引つ張っていく。

滅多にない強引さに多少快は不思議に思ったが、それでもいつも通りに聞いてやるのだ。

「どうした？ 夏休みならちゃんと花火大会に連れて行ってやるぞ？」

「違う！ 聞きたいことがあるの！」

その反応で今回は真面目な話だと確信した。そして屋上に着けば真摯な瞳を向けてくるのだ。

「一体どうした？ お前らしくない」

こんな場面では相手を和らげてやった方がいいと快は心得ている。相手が翡翠ならなおさらだ。

「…お父さんは敵じゃないんだよね？ 信じて良いんだよね？」

ストレートである。快に対しての質問に翡翠がカーブを投げるなんてことはほぼない。だからこそ快は真つ直ぐ答えるしかないのだ。

「翡翠、確かに今回は風野博士のクローンが敵になったが、お前の母さんは博士のことを信じてた。だからお前も信じてやれ」

「証拠は？」

「翡翠？」

「証拠がないよ！ お父さんの研究はいつも皆を苦しめてばかりだよ！ この前のデビル・アイだって今回のクローンだって快を怪我

させてばかりじゃない！

どうしたら信じられるのか分からないよ…」

滅多に泣かない少女が泣いている。

ブラッドと戦った時も自分の父親の研究が絡んでいた性が、翡翠は責任を感じてならなかった。

だが、快は一つ溜息を付いて話始めた。

「翡翠、俺の血液が何型か分かるか？」

いきなり変わった話に翡翠は治療兵ならではの答えを返した。

「A型のマイナス…」

「そうだ。持つ奴は少ないが母さんと同じだ。だが、親父の血液なんてこの世にないだろ？」

風野博士は俺が怪我してもいいように、俺が生まれる前に血液操作をして助けてくれた人なんだ。治療兵ならその事の重大さが分かるよな？」

十分だ。血液がないことが命取りになる場合は多々あるのだから…

「だからさ、お前も気に病むな。風野博士は絶対TEAMが救い出す」

快の言葉に翡翠は穏やかな笑みを浮かべた。それは夏の空にあっ
ていて快の心を揺さぶる。

「あのさ…翡翠」

「ん？ 何？」

キョトンとした表情を浮かべた翡翠とは対象的に快は真っ直ぐ翡翠を見た。

「俺は、お前のこと!!」

快は翡翠に近づいていく。が!

「快ちゃん! 任務だよ!」

突然飛び込んで来た間の悪い奴が一名。色鳥白真である。

「任務…」

この時ほど任務を怨んだことはない。
そしてさらに続く悪循環。

「あゝ!! 翡翠が泣いてる!」

「快! あんた翡翠に何言ったの!」

友人達が口々に文句をたれる。間違いなくこのあとにバスタークルスの批難の嵐に遭わなければならない。

「違うよみんな! 快は悪いんじゃないよ!」

「風野さん、何も言わなくていい。篠原は泣かせるようなこといったんだろ?」

「そうよ! 明らかに悲しんで泣いた後じゃない!」

そうとなれば自然と快到批難がいく。もう告白どころではない。

「快、覚悟なさい!!」

紫織の鉄拳が快に襲い掛かる。

快の恋路はまだまだ厳しく険しそうだ。

…傍目から全てのいきさつを見ていた少女が一人呟く。

「これから楽しくなりそうですね、龍二さん」

「ああ、間違いない」

騒々しい夏が始まろうとしていた。

第四十八話：騒がしい夏は始まる（後書き）

これでTHE TEAM！（2）は終わりです。

次は今回より面白くしていきますよ！？

何より、自己紹介コーナー再開しなくちゃ…

では、THE TEAM！（3）でお会い致しましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0939e/>

THE TEAM！（2）

2010年10月12日15時27分発行